



富山県婦中町

友坂遺跡

発掘調査報告Ⅱ



1993. 3

婦中町教育委員会

序

最近全国各地で発掘調査が行われ、貴重な遺物や遺構が発見され大きな話題となっている所も少なくありません。

このような文化財を発掘し、保護し過去の人々の築き上げられた文化を継承する事は地域社会の発展につながるものと思います。

今回、婦中町立朝日小学校体育館、ランチルーム等の建設にあたって、発掘調査を平成4年6月～8月にわたり、とりいそぎ実施いたしました。

そこから、奈良・平安時代の住居跡等が発掘され、その調査報告書をまとめ、多くの方々に活用いただき、文化財保護の一助となれば幸いであります。

終わりに調査実施及び本報告書の刊行にあたり、格別のご援助をいただきました地元の方々をはじめ関係機関のみなさんに厚くお礼申し上げます。

平成5年3月

婦中町教育委員会

教育長 清水信義

例　　言

- 1 本書は婦中町立朝日小学校体育館・ランチルーム建設に伴う発掘調査報告である。
- 2 調査は富山県埋蔵文化財センターから調査員の派遣を受けて、婦中町教育委員会が実施した。
- 3 調査事務局は、婦中町教育委員会に置き、文化係長見波重尊が調査事務を担当し、課長清水隆吉が総括した。
- 4 調査期間及び面積は次のとおりである。なお、体育館・ランチルーム建設予定地の調査区をA地区、浄化槽建設予定地をB地区とした。

A地区　調査期間 平成4年6月29日～8月10日（延29日間）　調査面積440m²

B地区　調査期間 平成4年7月13日～7月24日（延8日間）　調査面積 33m²

- 5 調査参加者は以下の通りである。

調査員 富山県埋蔵文化財センター文化財保護主事 岡本淳一郎・伊佐智法

調査作業員 武部孝幸・埜田敏子・鶴枝京子・安川嘉一・小西正夫・村井梅則・酒井安正・藤井正義・矢郷徳吾・奥村重義・桐谷重里・老田博義・西村源治・安川重信・數井スマ子・數井美子・高田利夫・橋本静子・高山ミドリ・土橋正一・小竹亀次郎・島倉美喜夫・山崎清子・金田重之・金田稔・田村梅則・吉川松世・中島幸治・高田庄春・島倉実・沼正治・中田穂子・鈴木五月・吉田芳澄・中田燕子・中田恵子・田村重則・山崎シサオ・金田美智代・埜田礼子・新村芳昭・数井信好・若田数義・老田和子・福井清則・中島ハルエ・高瀬政則・宮崎ミサ・平井光代・中島宗則・五十嵐芳良・藤井考作・安川和夫・水上太一・朴谷光義・田村春雄・片瀬茂喜・数井清雄・田村美代治・上田弘明・平井トモエ・金田孝正・福井佳代・上田忠弘・数井すま子・五十嵐宗信・花鳥三通士・山崎ふみ・田中幸一・本田スミ子・渡辺政雄・前坂弘之・村上正夫・大島豊吉・渡辺正三・野原善信・田中光子・舟田登美子・山田文子・西田國子・荒川吉松・才記修・高田ミドリ・高橋みよし・内山證子・畠野高三・北林泰江・宮本豊一・池田百合子・安川浪子

整理作業員 舟田千津子・生田寿美子・中坪千春

- 6 発掘調査・資料整理・本書の作成には、下記の各氏から様々の援助をいただいた。記して、深甚なる謝意を表したい。（敬称略・五十音順）

越前慶祐・河西健二・狩野睦・久々忠義・斎藤隆・酒井重洋・寒川旭・島田修一・高梨清志・橋本正春・山本正敏

- 7 本書の編集と執筆は調査担当者の岡本・伊佐が行い、個々の責は文章末に記した。

- 8 本書は本文・図版（写真）からなる。

- 9 本書の図版の縮尺は原則的に以下のとおりとし、スケールを入れ示した。

遺構 竪穴住居跡・土溝・1/40 遺物 1/3

- 10 本書の土層・土器・陶磁器の色調は〔小山・竹原1967〕・〔尚学図書1986〕を用いた。

- 11 遺構は今回の地区の調査・種別毎に一連の番号を付け、その前にS I：竪穴住居跡、S D：溝、S K：穴、S X：その他の遺構等の分類記号を付記する。また、検討の結果調査時の遺構種別・番号が適当でないものは欠番とした。

- 12 遺物は本書で一連の番号を付けその番号をもとに記述してある。

- 13 写真図版のうち遺物写真には写真毎に、右側に図版内の通し番号を、左側には遺物実測図の番号を示してある。

- 14 本書で使用した方位は真北、高さは標高である。

- 15 今回の調査で出土した遺物はFtyuumati TomoSaka の内FTSと第4次第2期の4-2を採り、「FTS-4-2」を冠し、出土した区名・遺構名称を記入した。

目 次

I 位置と環境.....	1	IV 遺物.....	12
1 遺跡の立地.....	1	1 A地区出土の遺物.....	12
2 歴史的環境.....	2	(1) 中・近世の遺物.....	12
II 調査にいたる経緯.....	2	(2) 古代の遺物.....	13
1 調査にいたる経緯.....	2	2 B地区出土の遺物.....	23
2 調査の方法.....	2	Vまとめ.....	24
III 遺構.....	4	1 中世における遺跡の性格について.....	24
1 層序.....	4	2 古代竪穴住居について.....	25
2 A地区.....	4	3 竪穴住居跡出土土器の時期について.....	26
(1) 中・近世の遺構.....	4	4 友板遺跡における進歩について.....	27
(2) 古代の遺構.....	6	引用・参考文献.....	28
3 B地区.....	11		

插 図 目 次

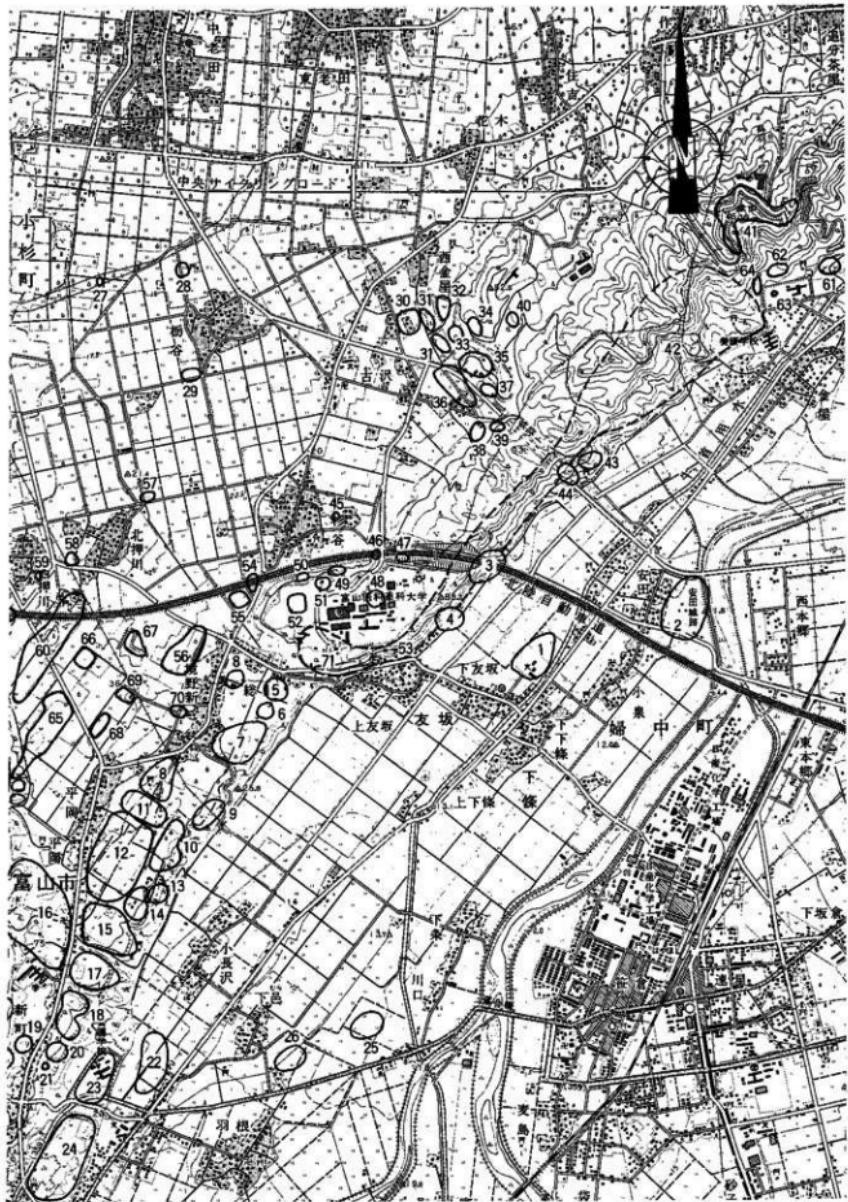
第1図 友板遺跡と周辺の遺跡.....	1	第13図 A地区 S I 02・S X01・包含層遺物実測図.....	16
第2図 発掘区割図.....	3	第14図 A地区包含層遺物実測図(1).....	18
第3図 基本層序模式図.....	4	第15図 A地区包含層遺物実測図(2).....	19
第4図 A地区遺構全体平面図.....	5	第16図 A地区包含層遺物実測図(3).....	20
第5図 A地区 S D01・05遺構図.....	6	第17図 A地区包含層遺物実測図(4).....	21
第6図 A地区 S I 01・02遺構図.....	7	第18図 B地区 S K01・04、包含層遺物実測図.....	22
第7図 A地区 S I 01・02遺物出土状況図.....	9	第19図 B地区包含層遺物実測図.....	23
第8図 A地区 S I 03・S X01遺構図.....	10	第20図 友板遺跡中世遺構全体図.....	24
第9図 B地区遺構全体平面図.....	11	第21図 富山県内のカマド導入後の竪穴住居の規模.....	25
第10図 B地区 S K01・04・05遺構図.....	11	第22図 竪穴住居跡出土食膳具法量表.....	26
第11図 A地区 S D01・S K05・包含層遺物実測図.....	12	第23図 管状土錐孔径測定部位図.....	27
第12図 A地区 S I 01・02出土遺物実測図.....	15		

表 目 次

第1表 周辺遺跡地名表.....	1	第4表 カマド付き竪穴住居跡発掘遺跡一覧.....	25
第2表 A地区日誌抄.....	3	第5表 用途別土器組成.....	26
第3表 土器器種分類表.....	13		

写真図版目次

図版1 A地区遺構(全景・S D01断面)	図版8 A・B地区遺物(遺構・包含層)
図版2 A地区遺構(S I 01・02)	図版9 A地区遺物(S I 01・02)
図版3 A地区遺構(S I 01)	図版10 A地区遺物(S I 02・S X01)
図版4 A地区遺構(S I 02)	図版11 A地区遺物(包含層)
図版5 A地区遺構(S I 03・S X01・他)	図版12 A地区遺物(包含層)
図版6 B地区遺構	図版13 A地区包含層・B地区遺構
図版7 A地区遺物(珠洲・中国製陶器・他)	図版14 B地区包含層



第1図 友坂遺跡と周辺の遺跡 (1 : 25000)

I 位置と環境

1 遺跡の立地（第1図）

友坂遺跡は、富山県婦負郡婦中町下下条・下友坂・安田に広がる。

友坂遺跡は富山平野のほぼ中央部に位置している。富山平野は東側に3,000m級の山々が連なる北アルプス、南は飛騨山地、西側は石川県との県境にのびる両白山地、北は富山湾に囲まれている。飛騨山地から延びる小起伏地であ

番号	遺跡名	時代
1	友坂	縄文・古代・中世
2	安田城跡	中世～近世
3	友坂天神	縄文・古代
4	友坂金城坊	古代？
5	越野Ⅰ	不明
6	越野Ⅱ	縄文
7	越野Ⅲ	縄文・古墳
8	越野Ⅳ	不明
9	越野Ⅴ	縄文
10	小長沢Ⅰ	奈良・平安
11	大開Ⅱ	不明
12	平岡	縄文
13	小長沢古墳群	古墳？
14	宮ノ高A	縄文
15	宮ノ高B	縄文
16	新開	先土器・縄文・古代
17	二本榎Ⅱ	縄文・奈良・近世
18	新町Ⅰ	奈良・平安
19	新町Ⅱ	縄文・古代・中世 近代
20	新町Ⅲ	古墳～平安
21	新町大塚古墳	古墳
22	下邑	不明
23	添ノ山古墳群	古墳
24	千坊山	旧石器・縄文・古墳

番号	遺跡名	時代
25	鶴ヶ城跡	中世
26	下邑東	不明
27	中老田南Ⅶ	奈良・平安
28	橋谷	奈良・平安
29	橋谷南	奈良・平安
30	下堤B	縄文・奈良・平安
31	古沢鹿跡	縄文・奈良
32	古沢下堤池東	縄文・弥生・古墳・ 古代
33	西金屋長尾冢 古墳	古墳
34	センガリ山 鹿跡	古墳
35	古沢A	旧石器・縄文・弥生 古墳・古代
36	古沢	旧石器・縄文・古代
37	古沢B	縄文
38	古沢東	縄文
39	古沢東窟跡	古代
40	西金屋スター 場	縄文・奈良
41	白鳥城跡	弥生～古墳・古代・ 中世
42	呉羽山丘陵古 墳群	古墳
43	古沢宮ノ山	古代
44	法尻遺	縄文・古代
45	杉谷北	古代
46	杉谷81	縄文
47	杉谷64	縄文
48	杉谷G	旧石器・縄文

番号	遺跡名	時代
49	杉谷II	
50	杉谷III	
51	杉谷H	旧石器・縄文・古代
52	杉谷	縄文
53	杉谷古墳群	縄文・弥生～古墳
54	杉谷67	旧石器・縄文・古代
55	境野新	旧石器・古墳・古代
56	境野新南I	縄文・古代
57	北押川スガマ	縄文
58	北押川1号窓	古代
59	西押川	中世・古代
60	北押川・墓ノ 段	旧石器・縄文・古代
61	寺町大平下	古代・中世
62	金屋喜平田	旧石器・古代・中世
63	金屋	古墳～中世
64	金屋筆山	中世
65	御坊山	旧石器・古代
66	北押川B	縄文・古代
67	向野池	旧石器・縄文・古代
68	池多東	縄文・古代
69	北押川C	縄文
70	境野新南II	縄文
71	杉谷A	弥生～古墳

第1表 周辺遺跡地名表（第1図に対応）

る呉羽丘陵は、広大な富山平野を中央で呉西平野・呉東平野に分ける。友坂遺跡の位置する呉東平野は、山地から流れ出た河川が、多くの扇状地を形成し、複合して平野となったものである。これらの扇状地の内で、友坂遺跡は婦中町の東を流れる神通川・常願寺川が形成した、中部扇状地〔深井1973〕の西端で、先述した呉羽丘陵の東裾に立地する。今回の調査区付近の標高は海拔約12mをはかる。

2 歴史的環境（第1図・第1表）

友坂遺跡の位置する呉羽丘陵周辺には、旧石器時代～中世まで多くの遺跡が立地する（第1図）。しかし、これらの遺跡は、ほとんどが呉羽丘陵上及びこれに接する台地上に立地する。丘陵上に立地する代表的な遺跡としては、縄文時代では平岡遺跡（12）、弥生時代・古墳時代では四隅突出型埴丘墓杉谷4号墳を始めとする杉谷古墳群（53）、中世では羽柴（豊臣）秀吉の天正13（1583）年の越中攻めの拠点となった白鳥城（41）等がある。

友坂遺跡の位置する呉羽丘陵東側の平野は、現時点では遺跡の分布状況が明らかではないが、古代には長沢郷に属していた〔婦中町1967〕。また、調査区の西約700mには、諸説はあるが延喜式内社に比定される友坂熊野神社、またその別当寺の友坂寺〔富山県1976・婦中町1968〕が遺跡東側呉羽丘陵西側上に立地していた。

中世になると、この婦負郡・射水郡を中心として広い範囲を支配した神保氏の支城の一つである鶴ヶ城（25）や白鳥城の出城となった国指定史跡安田城跡（2）のように平野部にも城館跡等の遺跡が立地し始める。先述した友坂熊野神社には「康永二年」（1343年）銘のある石層塔残欠〔京田1976〕や宝幢印塔がある。また、文献資料では文明十六年の「政所賦銘引付」で奉公衆小田氏の所領としてみられる〔富山県1975・1984〕。また、下条という地名を奉公衆である武田下条から引く説もある〔婦中町史1967〕。

近世では、正保4（1647）年の「越中道記」で飛驒街道の脇道である「越中婦負郡之内五福村から飛州小豆村に至る道筋」に「下条村」がみられ〔富山県1978・木下他1979〕交通の要衝となっていたことがわかる。

II 調査に至る経緯

1 調査に至る経緯（第2図）

友坂遺跡は今回を含め4次にわたって発掘調査が行われている。

第1次調査 昭和56年に町立朝日小学校校舎改築事業に伴って2,000m²を対象に試掘調査、1,400m²の本調査が行われ柱立建物・樹・溝・井戸・土壌が検出された〔狩野他1984〕。

第2次調査 昭和57年度に、町立朝日保育園建設に伴って1,200m²を対象に試掘調査、700m²を対象として本調査が行われ、中世の柱穴・井戸・溝が確認された〔狩野他1984〕。

第3次調査 平成3年に町立朝日小学校体育館等改築に先だって、既設体育館・便所の解体前に計画面積約1,060m²の内、既存体育館外の北側を700m²対象として試掘調査が行われた〔島田1992〕。その結果、遺物が数点出土し、既存体育館下に遺跡が広がる可能性が示唆された。

第4次調査 今回の調査に当たる。平成4年5月、既設体育館の取り壊し後、第3次調査の継続調査で既存体育館・便所の下の部分約400m²を対象に試掘調査をした。その結果、計画面積1060m²のうち約440m²に中世・古代の遺跡が遺存していることが確認された。試掘結果を元に協議を行なった結果、体育館等改築の変更はしがたいため、今回の記録保存調査を急遽実施する事となった。またこれに伴う浄化槽も本調査対象にし、33m²の本調査を行った。

2 調査の方法（第3図）

今回の調査は、先述したとおり調査区が2カ所ある。一カ所は体育館・ランチルームに伴う調査区で、A地区とした。また、もう一カ所はこれに付随する浄化槽の調査区でB地区とした。

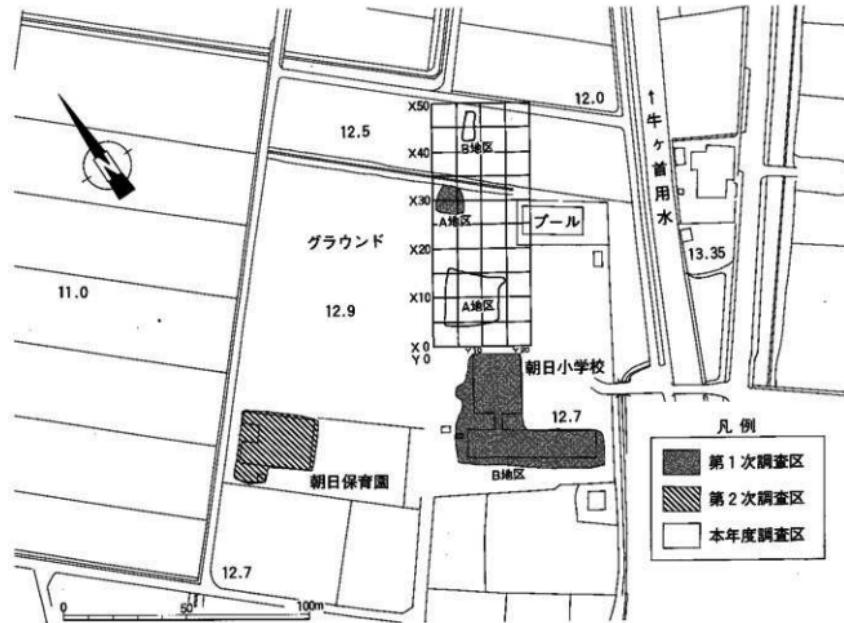
発掘調査の事前準備として、まず重機及び入力により盛り土と基礎跡の撤去を行なった。次に、遺物採り上げ・測量の基準として、A地区・B地区一連に10m間隔に基準杭を設け、X軸を南北方向にY軸を東西にとり、2m×2mを一区画とした。なお、X軸の方向はN-33°-Eを示す。

発掘調査は、まず上層の包含層の発掘を行い、遺構を発掘し、測量及び写真等の記録を行った。上層調査終了後、下層の包含層・遺構の発掘し、記録を探り發掘を終えた。

調査の進捗状況は以下の表のとおりである。

月 日	A 地 区	B 地 区
6 月 29 日	A地区調査開始。表土・盛土除去。	
7 月 1 日	前日からの降雨で調査区に水が溜まる。	
7 月 3 日	包含層掘り。	
7 月 8 日	測量用基準杭打ち。	
7 月 10 日	遺構掘り開始。旧体育館・便所の基礎の掘り上げ。	
7 月 13 日	S D01遺構掘り開始。	
7 月 16 日		B地区表土除去。
7 月 17 日		測量用基準杭打ち。
7 月 23 日	断面図化。	遺構精査開始。
7 月 24 日	上層全景写真撮影。	遺構写真撮影。
7 月 27 日	遺構全体図化開始。	平面図化。調査終了。
7 月 29 日	古代包含層掘り開始。	
7 月 31 日	遺構精査・遺構掘り開始。	
8 月 3 日	S I 01・02清掃及び断面写真・図化。	
8 月 5 日	下層全景写真撮影・平面図化の準備。	
8 月 6 日	平面図化。	
8 月 10 日	朝日小学校5・6年を対象に見学会を開催する。調査終了。	

第2表 調査日誌抄(1992年)



第2図 発掘区割図 (1:2000)

III 遺構

1 層序 (第3図)

(1) A地区 A地区は小学校のグラウンドとして利用され、全体に厚さ40~60cmの盛土があった。また、中・近世、古代の2面の遺跡が重複する。遺構は3層下に中世、6層下に古代の遺構を検出した。

A地区では古代遺構検出面から多数の噴砂を確認した。地震による液状化噴砂〔寒川1992〕と考えられる。幅1~15cmで、古代の遺構・包含層を切り、中・近世の遺構・包含層の下で止まっている(図版6-4)。方位は北東方向を指す。寒川氏のご教示によれば越中に多大な被害をもたらした1586年の天正の大震による可能性が大きいとのことであった。

(2) B地区 B地区は基本的にはA地区と同様であるが、耕地整理のため、中・近世の包含層は削平を受け、古代の包含層が表土下直ぐに現れる。

(岡本)

2 A地区 (第4図・図版1)

A地区からは中・近世、古代の2時期の遺構面を発掘した。

(1) 中・近世の遺構 (第5図・図版1)

中・近世の遺構には溝、穴、柱穴があり、いずれの遺構も灰褐色砂質ロームから掘り込まれている。

ア 溝 (第4・5図、図版1)

S D01は、調査区の南壁(X4、Y8・9)から調査区中央付近(X10・Y8)で直角に曲がり東壁(X7~10・Y14)につながる。

規模は、上端幅約5.7m・下端幅約2.5m・深さ約0.8mをはかる大溝である。

埋土は、基本的に上から鉄分を多く含む褐色砂質ローム、褐色粘土質ロームである。地山は、にぶい黄褐色砂で、湧水層である。西の肩には、にぶい黄褐色砂質ローム、にぶい黄褐色砂が堆積している層が1・2層の間に入っている。溝の東及び南の肩には、一段の平坦面が認められる。

出土遺物には、須恵器、中国製陶器、漆器がある。須恵器は、溝の肩及び第1層から多く出土しており、混入品と考えられる。地山付近からは、須恵器のほか青磁(12)・漆器(20)が出土している。

イ 穴 (第4・5図)

土坑は、X11~13・Y4・5とX13・Y10~12区の2つのまとまりとして捉えることができる。大きさでは、径が約2mの大型なものと、20~50cmの小型なものに分かれる。

(ア) SK05 X12・13、Y4区で検出した。形状は隅丸方形、規模は長軸2.4m・短軸2m・深さ60~70cmを測る。埋土は、單一でやや縮まりの無い褐色砂質ロームで、一度に埋められたものであろう。

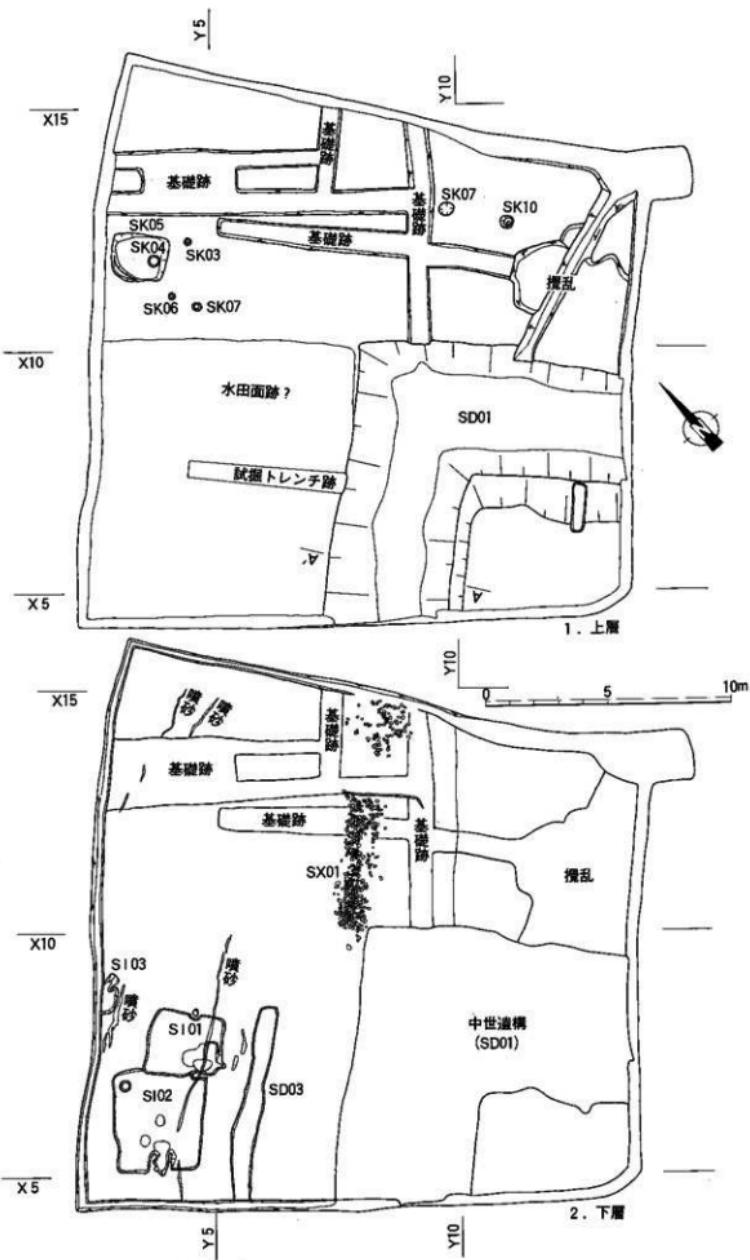
遺物は、須恵器・土師器・珠洲細片が出土している。

(イ) SK02・04・06~10 埋土は、暗褐色ローム・褐色砂質ローム・暗褐色砂質ロームといずれも褐色系を基本とする。深さは、10cm~50cmと幅がある。

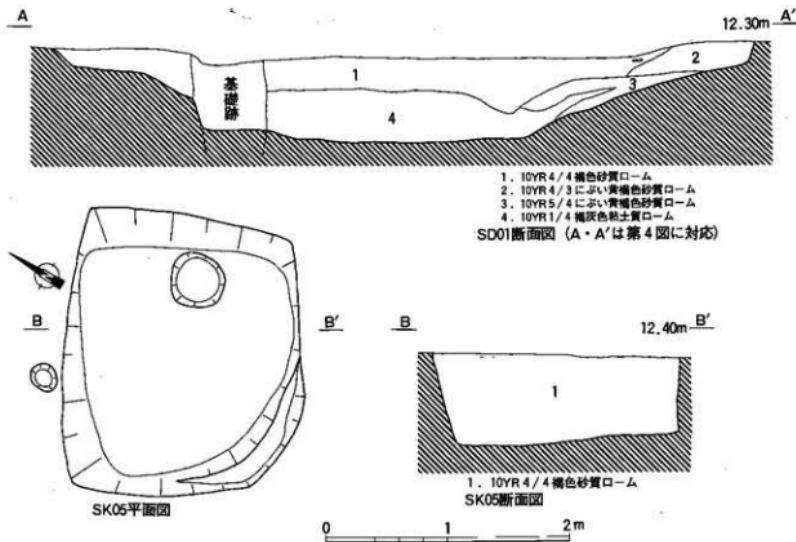
これらの小型の穴からは、遺物は出土していないため正確な時期はわからない。しかし、中世の遺物が出土しているSK05の埋土上から小型のSK04がつくられていることと、SK04とそのほか小型土坑の埋土の色調が近似していることからすると、中世以降の穴と考えられる。



第3図 基本層序模式図 (1:40)



第4図 A地区遺構全体平面図 (1:200)



第5図 A地区 SD01・SK05遺構図 (1:40)

ウ 水田跡 (第4図)

発掘区の南西部に酸化鉄が5~10cmの厚さで堅く結び合って堆積している層(第5層)の広がりがあり、畦畔は確認できなかった点で疑問はあるが水田跡になる可能性がある。なお、この鉄分を多く含む面は、調査区の南側と西側に延びるものと考えられる。この鉄分層からは、須恵器・土師器・越中瀬戸が出土している。時期を決める越中瀬戸は、実測図は示していないが、図版8-3の上から3段目の中央の皿片で、17世紀代〔安田1988〕である。(伊佐)

(2) 古代の遺構

古代の遺構には、竪穴住居跡3・穴2・溝1・石敷遺構1があり、褐色砂質ローム層を掘り込んでいる。古代遺構は東側を中世造構・学校基礎等で古代の遺構が破壊されていた可能性がある。

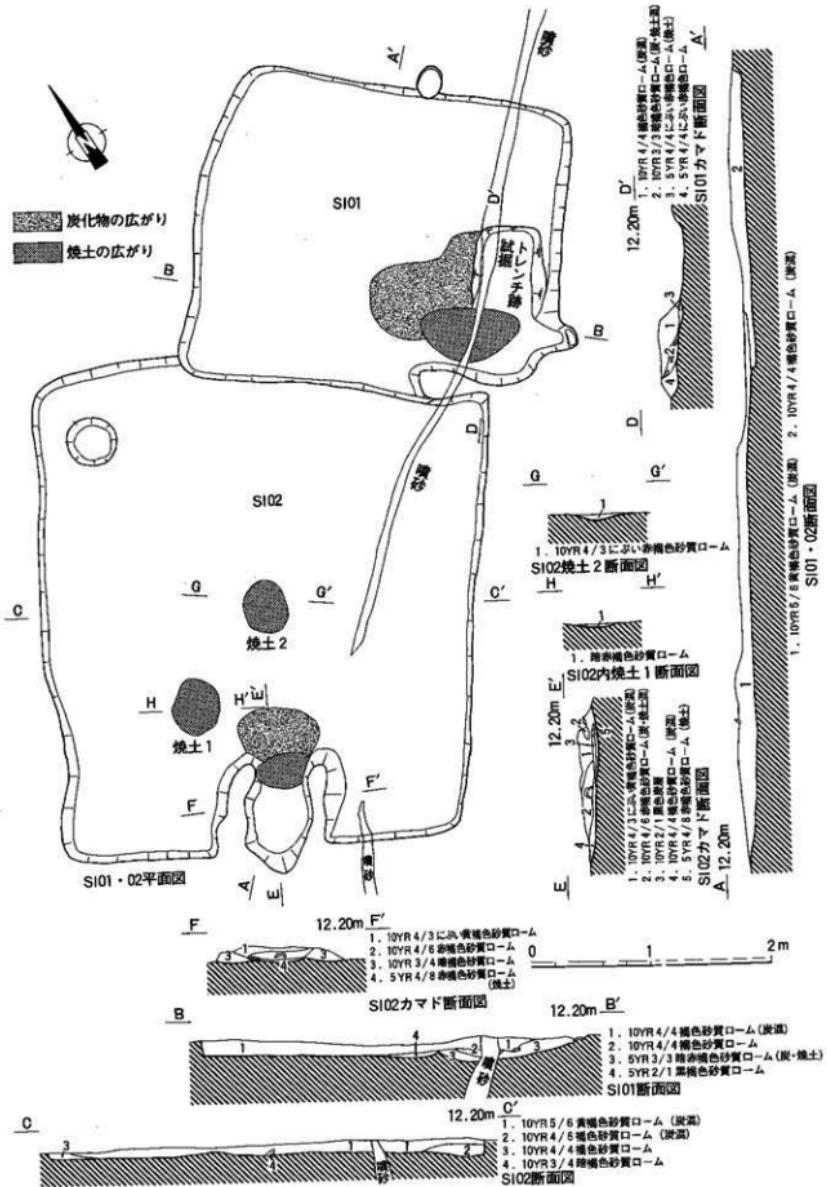
ア 竪穴住居跡

S I 01・02・03の3棟を発掘した。いづれもX 5~10・Y 3~6区と調査区南東隅から検出した。本報告における竪穴住居跡の計測値及び記載事項については以下のとおりである。

方位 カマドの向きを主軸とし、北に対する傾きを示す。

規模 號の長さは壁下端間の距離を測った。面積は床面積である。

カマド カマド部位は諸説〔斎藤1978、谷1982、外山1991・1992、横川1987〕あるが、本報告では焚出口・燃焼部・煙道の名称を使用した。焚出口は焼き口に燃料を燃焼部に入れ、燃焼後の炭化物をかき出した部分。燃焼部とは焼き口で区切られる。燃焼部は袖部・天井部に覆われ、燃料を燃焼した部分。底面に広がる焼土を火床と呼ぶ。火床の奥には煮炊具を持ち上げる支脚が置かれる。天井には煮炊具を懸ける懸け口が開けられる。煙道部とは煙道口で区切られる。煙道は燃焼部から煙を住居の外に出す部分で、そのため底面は傾斜する。最後に煙出口となる。



第6図 A地区 SI01・02構造図 (1:40)

(ア) S I 01 (第6図・7図、図版2・3)

位置 本住居跡はX 8・9、Y 4~6区で確認され、S I 02と重複する。

主軸方位 N-49° -Wを示す。

規模・形状 東壁2.10m・南壁2.80m・西壁2.45m・北壁2.58m、床面積6.9m²、北側がやや広い隅丸方形を呈する。

壁高 削平を受けているものと考えられる。残存高で平均約10cmではば垂直に立ち上がる。

覆土 覆土は炭混じりの10YR 4/4褐色砂質ローム1層である。

カマド 東壁南端に1基付設される。北側の袖は擾乱のため確認できなかったが、現存全長140cmである。主軸方位はN-52° -Wを示す。焚口部は、焚口幅不明だが、カマド前面には幅80cm・奥行き86cmの範囲に炭層が広がる。

燃焼部は奥行き106cm・幅50cmで、火床は幅46cm・長さ82cm・厚さ3cmの楕円形に焼土が広がる。焚き口から90cmの燃焼部内の火床より奥には、杯A(21)の底部を上にして転用した支脚がある。袖は5YR 4/4にぶい赤褐色砂質ロームを使用している。燃焼部内の覆土は、一番下に焼土、その上に炭層、最後に天井が崩落と思われるにぶい黄褐色砂質ロームが堆積している。

煙道は残存部で長さ約30cmで、煙出口は竪穴住居壁外に出る。

柱穴・壁溝・貯蔵穴等ほかの諸施設は確認されなかった。

出土遺物 須恵器・土師器があり、すべてカマド内及び炭層から出土している。

(イ) S I 02 (第6・7図、図版2・4・5)

位置 本住居跡は、X 6~8・Y 3~5区で確認され、S I 01と重複している。

主軸方位 N-32° -Eを示す。

規模・形状 東壁3.50m・南壁3.18m・西壁3.94m・北壁3.70mで、床面積12.94m²で、隅丸方形を呈する。

壁高 削平を受けているものと思われるが、残存で平均15cmを測る。

覆土 壁付近は10YR 4/6褐色砂質ロームが堆積し、中央部分は炭混じりの10YR 5/6黄褐色砂質ロームが堆積する。

カマド 南壁にはば中央に1基付設される。現存全長は100cmで、主軸方位は住居主軸と同じである。

焚口部は、焚口幅40cmで、前に幅68cm・奥行き40cmの範囲に厚さ2cmの炭層が広がる。

燃焼部は奥行き86cm・幅46cm、袖は10YR 3/4暗褐色砂質ロームである。火床は幅40cm・長さ28cmの楕円形に焼土が広がる。焚き口から40cmの燃焼部内には腰A(31)の底部を上にして転用した支脚がある。燃焼部内の覆土は一番下に焼土その上に炭層、最後に天井が崩落と思われるにぶい黄褐色砂質ロームが堆積している。

煙道と燃焼部との境目は明瞭ではない。煙道は残存部で長さ約22cmで、竪穴住居跡の壁の外にやや出る程度である。

焼土 2カ所確認された。焼土1はカマドの北側にあり、径40cm・厚さ3cmの円形である。焼土2は住居跡内にはば中央にあり、径40cm厚さ6cmである。

柱穴・壁溝・貯蔵穴等ほかの諸施設は確認されなかった。

出土遺物 須恵器・土師器・土錐があり、カマド内及び炭層、焼土付近から多く出土している。また、北側には完形の杯蓋(30)が出土した。

(ウ) S I 03 (第8図、図版6)

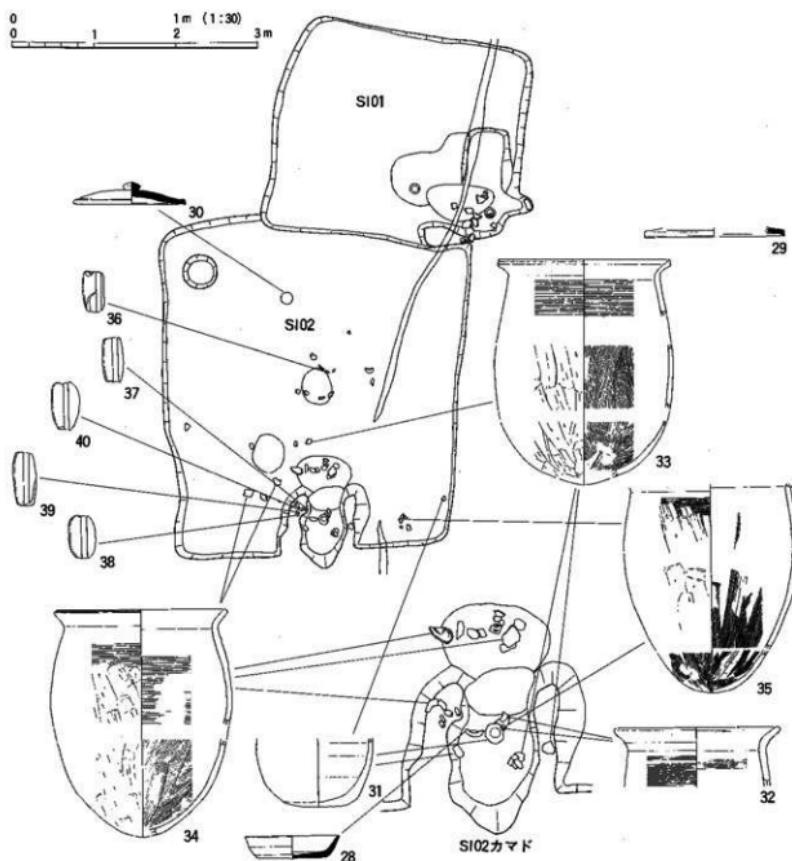
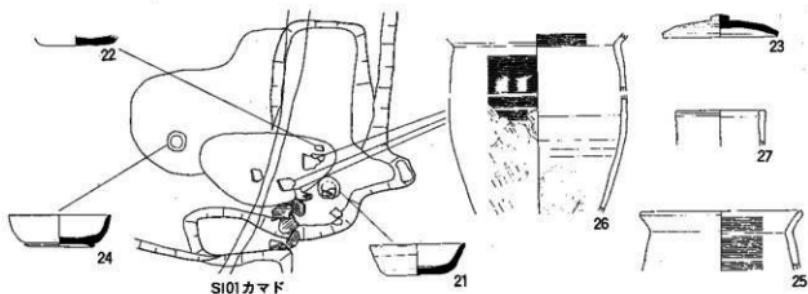
本住居跡はX 9・10Y 3区で確認され、カマド部分のみを発掘した。

壁高 残存で12cmで、覆土は炭混じりの10YR 4/3黄褐色砂質ロームである。

カマド 1基付設される。現存全長65cmである。主軸方位はN-78° -Eを示す。

柱穴及びほかの諸施設は確認されなかった。

出土遺物 須恵器・土師器細片があり、カマド付近から出土している。



第7図 A地区 SI01・02遺物出土状況図 (1:60, カマド:30)

イ 石敷き遺構

S X01 (第8図・図版6)

本遺構はX10~15、Y8・9区で確認された。主軸はN-40°-Eを示す。

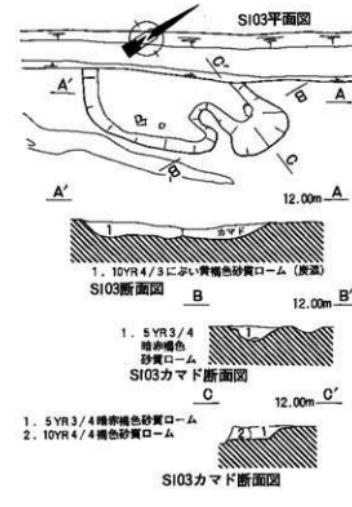
規模は体育馆基礎跡の搅乱で途切れるが、幅1.4mから2m、長さ10.5mにわたって石敷きを検出した。中世遺構S D 01の肩部に石が残っていたこと等から、さらに南北に続いていたものと考えられる。断面は地山に、厚さ10cmで小砂利を敷き、その上に拳大の河原石が西側部分を中心に敷かれる。地山には石は含まれていないので河原等から運びられたものと考えられる。

出土遺物には石の間から須恵器・土師器破片が出土した。遺構の性格は区画か道路等が考えられる。

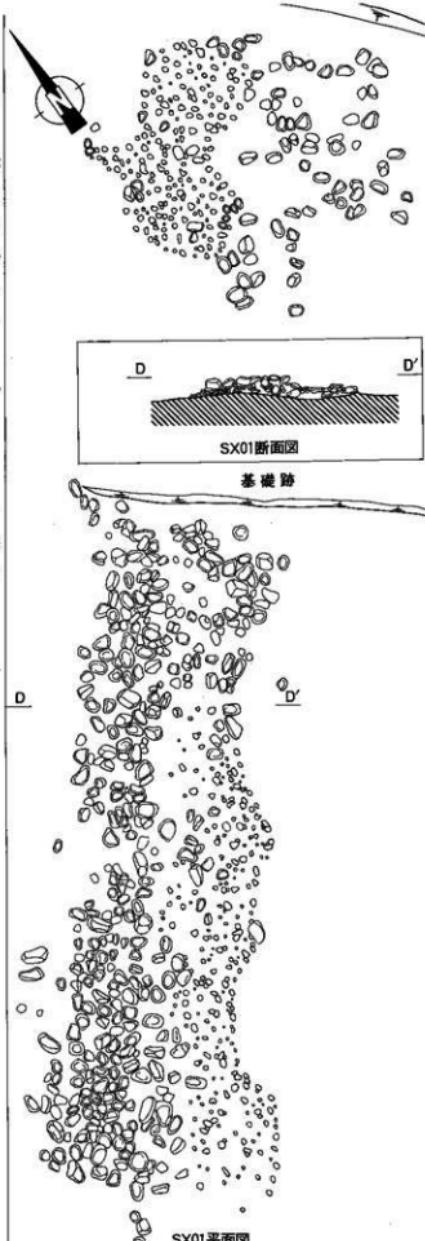
ウ 溝

S D 03 (第4図)

X 5~9・Y 6・7区で検出された主軸方位はN-41°-Eで、S X01とはほぼ同じである。規模は、幅1m前後、深さ約10cmである。10Y R 4/3にぶい黄褐色砂を覆土とする。遺物は出土しなかった。



第8図 A地区 S D 03・S X01遺構図 (1:40)



3 B地区

B地区からは古代の遺構を確認した。

(ア) SK01 (第10図・図版7)

遺構検出時はSK01~04の4つの穴に分かれていたが、1つの穴になった。X43・Y7・8区で検出した。

規模は、長さは不明であるが、幅は1m前後、深さ25cmである。形状は楕円形の穴になると考えられる。

出土遺物は覆土中より土器師・須恵器・土錐がある。

(イ) SK04 (第10図・図版7)

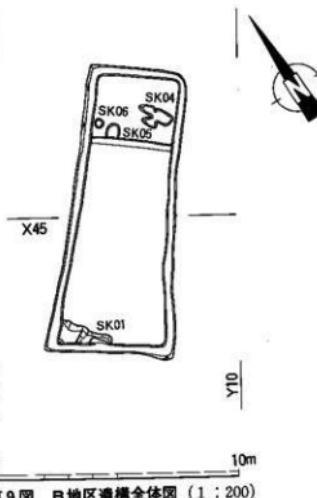
X47・48・Y9区で検出された。

規模・形状は幅40cm・長さ124cmと幅20cm・長さ46cmの2つの穴が接し、横に広がった瓢箪のような形状で、深さは10cmである。

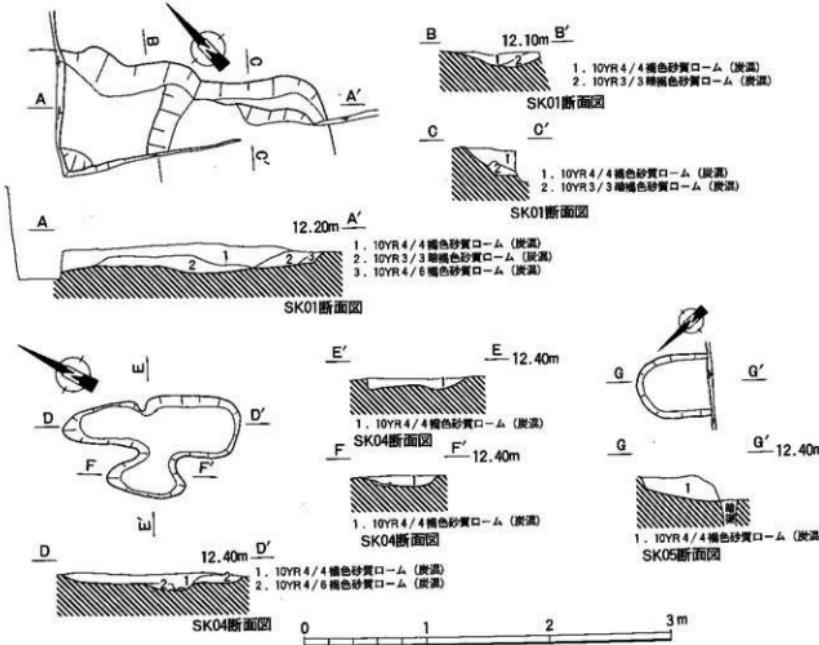
出土遺物は完形の須恵器杯蓋(127)が出土した他に土器破片・輪羽口・鉄錠がある。

(ウ) SK05 (第10図)

X47・Y8区で検出。削平されているが、長軸60cm前後・深さ20cmの楕円形の穴と考えられる。(岡本)



第9図 B地区遺構全体図 (1:200)



第10図 B地区SK01・04・05遺構図 (1:40)

IV 遺物

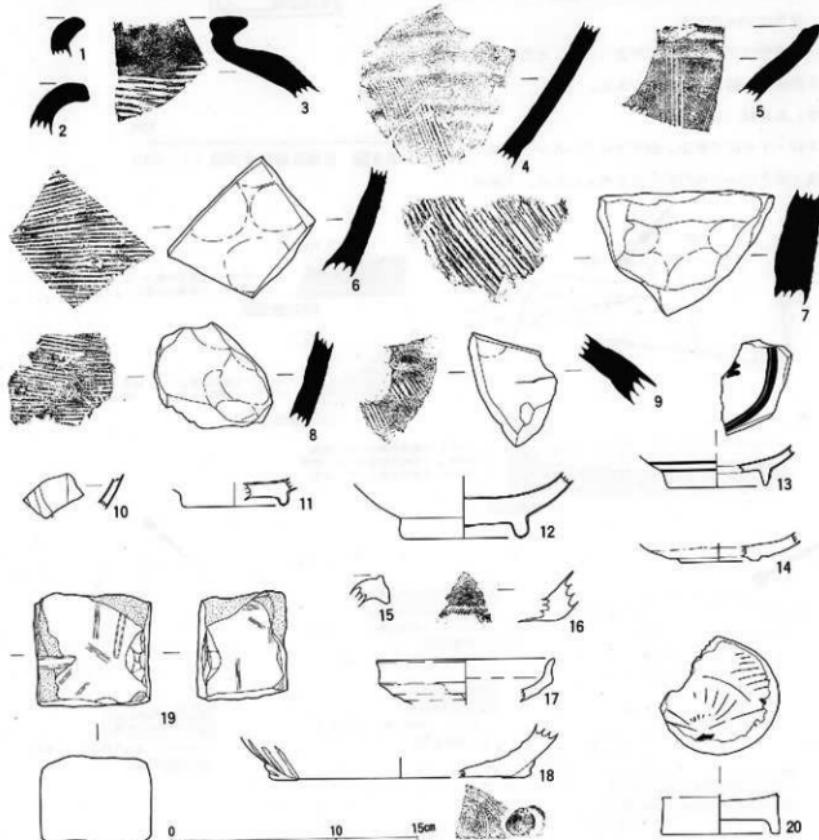
1 A地区出土の遺物

(1) 中・近世の遺物 (第11図・図版8)

今回の調査で出土した中世の遺物には、珠洲・中国製陶磁器(青磁)・壺器系陶器(常滑・越前・八尾)などがある。近世陶磁器には、越中瀬戸・瀬戸・瀬戸美濃・唐津・伊万里がある。そのほか、石製品(砥石)・木製品(漆器)が出土している。中近世の遺物は、大きく14世紀と16世紀から17世紀の2つの時期に分けてとらえることが出来る。

ア SD 01 出土遺物 中世の遺物としては、珠洲・中国製陶磁器が出土している。

3は、珠洲製の口縁で、焼成は良好である。口縁から少し離れた肩部から叩きが始まるがその叩きも粗いものである。4は、珠洲すり鉢の脇部片で、海綿骨針状のものを多く含む。この他の珠洲も、焼成の悪いものに海綿骨針が多い。



第11図 A地区SD 01・SK 05・包含層出土遺物実測図 (1 : 3)

く含まれる傾向がある。鉢し目は13本を単位としている。吉岡編年〔吉岡1989〕のVI期のものである。7は、珠洲窯の胴部片である。中国製陶器では、青磁が3点出土している。10は碗の胴部片で灰白色の緻密な胎土で、胎厚か0.5mmほどのオリーブ灰色の釉を施釉し、鎌蓮弁文が見られる。11は碗の底部片で灰白色の緻密な胎土に極小の黒色粒が含まれている。オリーブ灰色の釉を施釉しており釉厚は約1mmと厚い。12は、碗の胴部から底部にかけてで灰白色の緻密な胎土に極小の黒色粒が混入している。オリーブ灰色の釉を施釉しており釉厚は1mmと厚い。剖面に漆緋の痕跡がみられる。10は14世紀代のもの、11・12は15世紀から16世紀にかけてのもの〔亀井1986〕であろう。近世の遺物では、伊万里・瀬戸が出土している。13は伊万里の染め付皿である。18は瀬戸の底部と思われ、黒褐色の鉄釉が内面に見られる。外面は約3cmの幅の笠状工具で押し引いた跡が見られる。底部は糸切りで、親指くらいの粘土を貼りつけて簡単な足をしている。その他、漆器(20)も1点出土している。椀の底部で、内外面及び底部裏面にも黒色漆を塗り、内面底には刷の模様を赤色で描いている。同一個体の胴部片から、胴部外面にも赤色で模様が描かれていたことがわかる。高台は、約4cmと高く、約1.5cmほど削りだした形態である。久々〔久々1986〕の第II C期(16C後葉)のものと考える。なお、刷の模様は、友坂遺跡の第2次調査時〔狩野他1984〕に1点出土しているほか、姫中町小倉中郷遺跡・小矢市日宮遺跡〔上野他1978〕・上市町弓庄城跡〔久々他1985〕でもみられる。

イ SK 5 出土遺物 須恵器・土師器・珠洲が出土している。

ウ 包含層出土遺物

珠洲の器種には甕・壺・こね鉢・すり鉢がある。1・2は壺の口縁部である。II期からIII期にかけてのものである。6から8は、いずれも甕の胴部片である。珠洲全体から見ると、時期による偏りはみられない。5は、すり鉢の口縁部から胴部にかけてのもので、鉢し目は8本を単位としており、すり目が直線的なものである。口縁の平坦面が内傾していることから、V期からVI期にかけてのものと考えられる。瓷器系陶器は図示はしなかったが常滑・越前の甕の胴部片、八尾の甕の口縁部で14世紀代のもの〔酒井1985〕が出土している。近世陶磁器には越中瀬戸・唐津・瀬戸がある。16は、越中瀬戸のすり鉢の底部片である。14は、唐津皿の底部で、透明な釉がかけられている。17は、唐津皿の口縁部で、白色の釉を施釉している。そのほか、図示はしなかったが瀬戸の瓶子の肩片、小破片であるが瀬戸美濃の皿の底部が出土している。11は、砥石で、にぶい黄色の砂岩で荒砥ほどの細かさのものである。割れた後も小形製品の砥石として用いられている。また、側片を打ち欠いた後に摩滅している痕跡があることから、鉢として2次的に利用されていることも考えられる。

(伊佐)

(2) 古代の遺物

古代の遺物には、土器、支脚、管状土錐、砾石、輪羽口、鉄津、炉壁がある。

ア 土器の分類

須 恵 器					
杯 A	平坦な底部と外に聞く体部からなる。	壺 A	平坦な頸部とやや外に聞く口縁部からなる。		
杯 B	杯Aに低基な高台が付く器形である。蓋とセットになる。	壺 B	高台が付く肩の張った体部と外傾する口縁部からなる。		
杯 B 蓋	平坦な底部と大きく聞く口縁部からなる。頂部にはつまみが付く。	耳 板	平底で縦長の体部に外傾する口縁部が付く。両側に耳形の把手が付く。		
楕 A	小さい底部から外傾する体部が伸びる。	楕 A	楕長の楕形をした体部に口縁がつく。		
皿 A	底盤な底部から大きく述べる体部を持つ。体部は浅い。	楕 B	口が外傾し楕形の大きな頸部がつく。		
皿 B	皿Aに底盤な高台が付く。	康 瓶	器高より大きい口縁の口縁と半球状の体部からなる。		
蓋 A	肩の張った体部に短い口縁部からなる。	瓶	半球形で両側に把手がつく体部と外傾する口縁からなる。		
土 师 器					
桶 A	小さい底部から外傾する体部が伸びる。	壺 B	楕形をした体部に外傾する口縁部が付く。		
高 杯	大きく聞く底部と円筒状の基部からなる肩に大きく外に聞く杯部が載る。		半球形の体部に外傾する口縁部をもつ。		
甕 A	球形の体部に外傾する口縁部がつく。		バケツ状の楕形の体部に把手が付き、底には大きな穴が開く。		

第3表 土器器種分類表

イ A地区出土の遺物

(ア) S I 01出土遺物 (第12図・図版9) 土器(須恵器・土師器)が出土している。

須恵器 (21~24) 須恵器では杯A・杯蓋・杯Bが出土している。

杯A (21・22) 21は口径11.5cm・器高7.2cm・底径7.2cmで、径高指数が33、体部外傾度が64°である。底部の成形・調整手法は外面がヘラキリ後ナデ、内面が中心までロクロナデである。カマド支脚に転用されていたため、表面が激しく摩耗している。22は底径9.2cmで、底部外面の成形・調整手法はヘラキリ後ナデである。

杯B蓋 (23) 口径13.8cm・つまみ径2.2cm・器高2.8cmで、口縁端部は摘み出す形態である。頂部の成形・調整手法は外面がヘラケズリ後ナデ、内面は中心付近のみ一方向のナデで、その他はロクロナデである。

杯B (24) 口径12.3cm・器高3.9cm・台径7.6cmで、径高指数が32で、体部外傾度が73°である。底部の成形・調整手法は外面がヘラキリである。高台は内傾する。

土師器 (25~27) 豊B・他がある。

豊B (25・26) 25は口径19.4cm・頸部径17.3cmで、口縁部は外傾し端部を面取りし、体部上半の成形・調整手法は内面がカキメ、外面ナデである。26は頸部径20.4cm・体部最大径21.6cmで、体部の成形・調整手法は、内面上部がナデ・下半がハケメで、外面が上半カキメ・下半ヘラケズリである。

壺 (27) 壺の一種ではないかと考えられる。コップ状の形態で、沈線が一条入る。

(イ) S I 02出土遺物 (第12・13図・図版9・10) 土器(須恵器・土師器)・管状土錐が出土している。

須恵器 (28~30) 杯A・杯蓋がある。

杯A (28) 口径11.2cm・器高2.8cm・底径8.0cm・径高指数が25で、体部外傾度は64°である。底部の成形・調整手法は内面が中心部までロクロナデ、外面がヘラキリである。

杯B蓋 (29・30) 29は口径16.8cmで、口縁端部を摘み出す形態である。30は口径13.5cm・つまみ径2.0cm・器高2.7cmで、口縁部は途中で屈曲し、口縁端部は丸く下に引き出される。成形・調整手法は外面頂部がヘラケズリ後ナデ、内面は中心付近のみ一方向のナデで、その他はロクロナデである。

土師器 (25~27) 豊A・豊Bが出土している。

豊A (31) 支脚に転用されて表面は激しく摩耗する。底径7.6cm。成形・調整手法は内面が体部上半がロクロナデ、下部はナデである。外面の成形・調整手法は不明である。

豊B (32~35) 32は口径19.6cm・頸部径16.6cmで、口縁部は外傾し端部は丸くなる。体部上半の成形・調整手法は内・外面ともカキメである。33は口径20.8cm・頸部径18.4cm・体部最大径21.6cmで、口縁部の形態は外傾し端部を上方に引き上げ、沈線が一条入る。体部の成形・調整手法は、内面上部がカキメ・下半がハケメで、外面が上半カキメ・下半ヘラケズリである。34は口径20.4cm・頸部径18.6cm・体部最大径22.0cmで、口縁部の形態は外傾し端部を面取りし、沈線が一条入る。体部の成形・調整手法は、内面上半がカキメ・下半がハケメで、外面が上半カキメ・下半ヘラケズリである。35は頸部径19.3cm・体部最大径21.1cmである。体部の成形・調整手法は、内面上半がハケメ後ロクロナデ・下半がハケメで、外面が上半カキメ・下半ヘラケズリである。
(岡本)

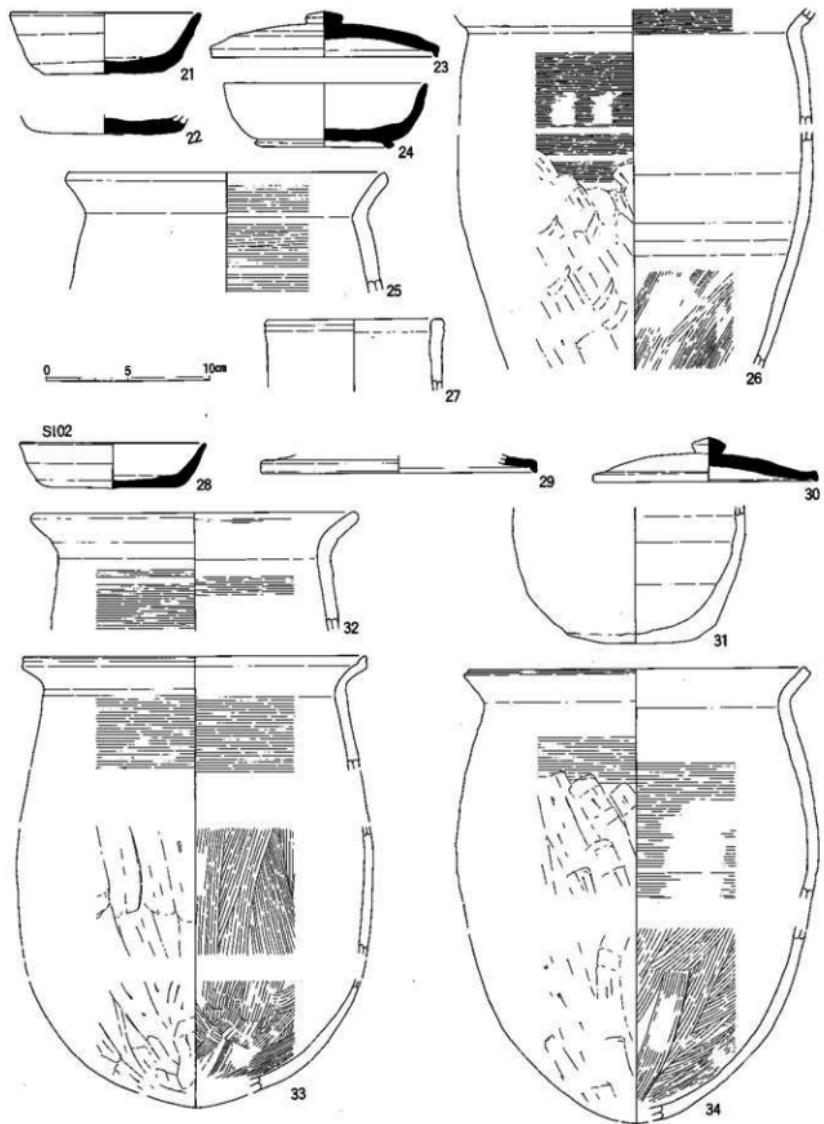
管状土錐 (36~40) 前回の調査報告〔狩野他1984〕の土錐Bに該当する。最大規模の平均長5.62cm・幅2.9mm・重量41.33g (29g~54g) である。孔径はすべて1cm以上のものである。
(伊佐)

(ウ) S I 03出土遺物 図示していないが、土器細片がカマド内及びその周辺から出土している。

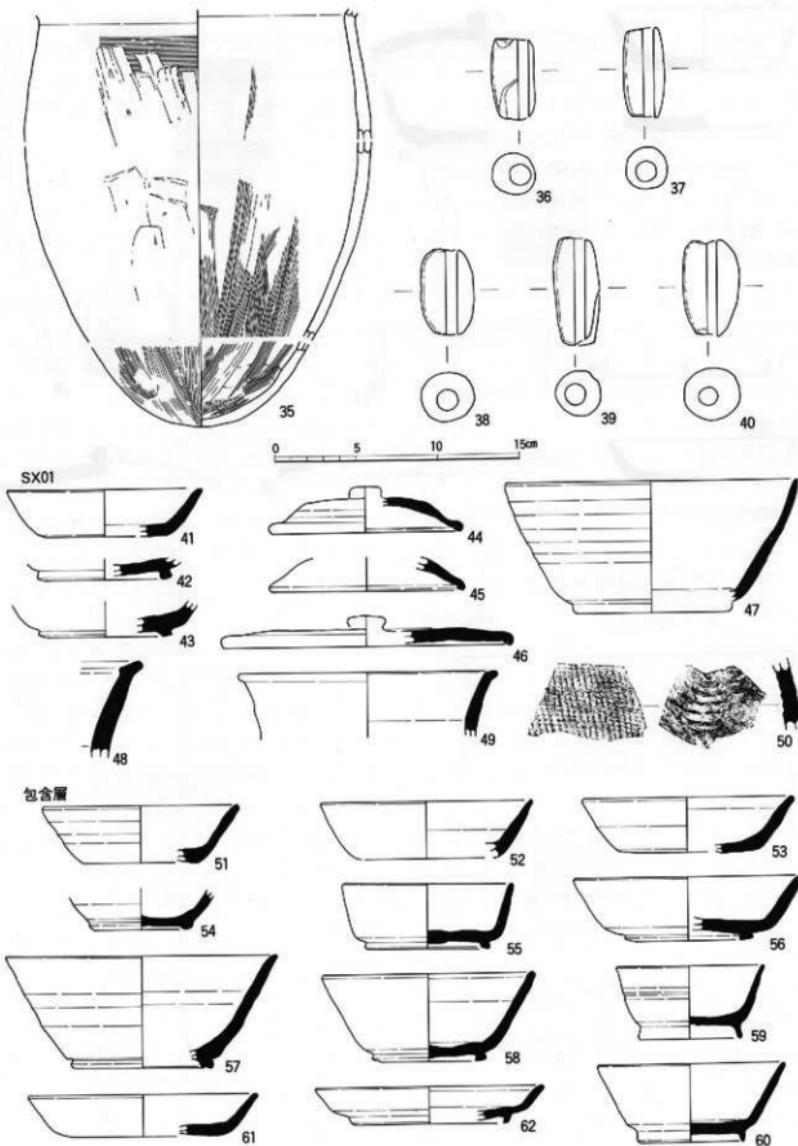
(エ) S X 01出土遺物 (第13図・図版10) 土器(須恵器)が出土している。

須恵器 (41~50) 杯A・杯B・杯B蓋・豊が出土している。

杯A (41) 口径11.8cm・器高2.9cm・底径7.8cm・径高指数25、体部外傾度60°である。底部外面の成形・調整手法



第12図 A地区 S101・02出土遺物実測図 (1 : 3)



第13図 A地区 S102・SX01・包含層出土遺物実測図 (1 : 3)

はヘラキリ後ナデである。

杯B (42・43) 口径は42が7.0cm・43が7.1cmである。底部外面の成形・調整手法は2点ともヘラキリ後ナデである。

杯B蓋 (44・46) 44は口径11.6cmで、口縁部は途中で屈曲し、口縁端部は巻き込む。天井部の成形・調整手法は外面部頂部がヘラキリ後ナデ、内面は中心付近までロクロナデである。45は口径11.8cmである。重ね焼きの痕跡が見られる。46は口径17.6cmである。頂部の成形・調整手法は内面がナデ、外側がヘラケズリである。

杯B b (47) 口径は17.8cm、体部外傾度は65°である。

甕A (48・49) 49は口径15.6cm・頸部径13.2cmで、口縁部は外側し、口縁端部は外に引き出される。

(オ) 包含層出土の遺物 (第13~17図、図版9・11~12) 土器(須恵器・土師器)・土錐・縄羽口が出土した。

須恵器 (51~70・73~87・100) 甕A・甕B・甕蓋・甕が出土した。

杯A (51~53) 51は口径11.8cm・器高3.6cm・底径7.0cm、径高指数が31、体部外傾度は57°である。底部外面の成形・調整手法はヘラキリ後ナデである。52は口径12.8cm・器高3.5cm・底径8.3cm、径高指数27、体部外傾度62°。

杯B (54~60) 底部外面の成形・調整手法は、外側がすべてヘラキリである。底部内面の成形・調整手法は54・58がロクロナデで、55・59・60が一方方向のナデである。

54は口径5.4cm、55は口径10.2cm・器高4.0cm・台径7.4cm、径高指数が39、体部外傾度76°である。56は口径13.8cm・器高3.9cm・台径6.3cm、径高指数が28、体部外傾度は57°である。底部の内面は滑らかで、摩滅している。57は口径16.4cm・器高6.9cm・台径8.4cm、径高指数が42、体部外傾度は60°である。58は口径12.8cm・器高5.4cm・台径5.8cm、径高指数が42、体部外傾度は65°である。59は口径8.8cm・器高4.5cm・台径6.2cm、径高指数が51、体部外傾度は70°である。60は口径11.2cm・器高4.8cm・台径6.2cm、径高指数が43、体部外傾度は65°である。

皿A (61) 口径13.6cm・器高2.6cm・底径9.0cm、径高指数が19、体部外傾度は55°である。底部の成形・調整手法は外側がヘラキリ後ナデ、内面がロクロナデである。

皿B (62) 口径13.8cm・器高2.3cm・台径9.0cm、径高指数が17、体部外傾度は54°である。底部の成形・調整手法は外側が回転ヘラケズリ、内面が一方方向のナデである。

杯B蓋 (63~68) 64は口径11.8cmで、口縁部が途中で屈曲し、口縁端部を巻き込む。65は口径13.6cmで、口縁部は途中で屈曲し、口縁端部は三角形に垂れる。66は口径15.4cmで、口縁部はなだらかに伸び、口縁端部は台形に垂れる。67は口径12.8cmで、口縁部はわずかに屈曲し、口縁端部は三角形に垂れる。頂部の成形・調整手法は外側がヘラキリ後ナデ、内面は中心部までロクロナデである。68は口径14.6cmで、口縁端部は三角形に垂れる。

椀A (69) 口径15.6cm・器高5.4cm・底径7.1cm、径高指数が35、体部外傾度が54°である。底部外面の成形・調整手法は外側がイトキリ、内面が中心部までロクロナデである。

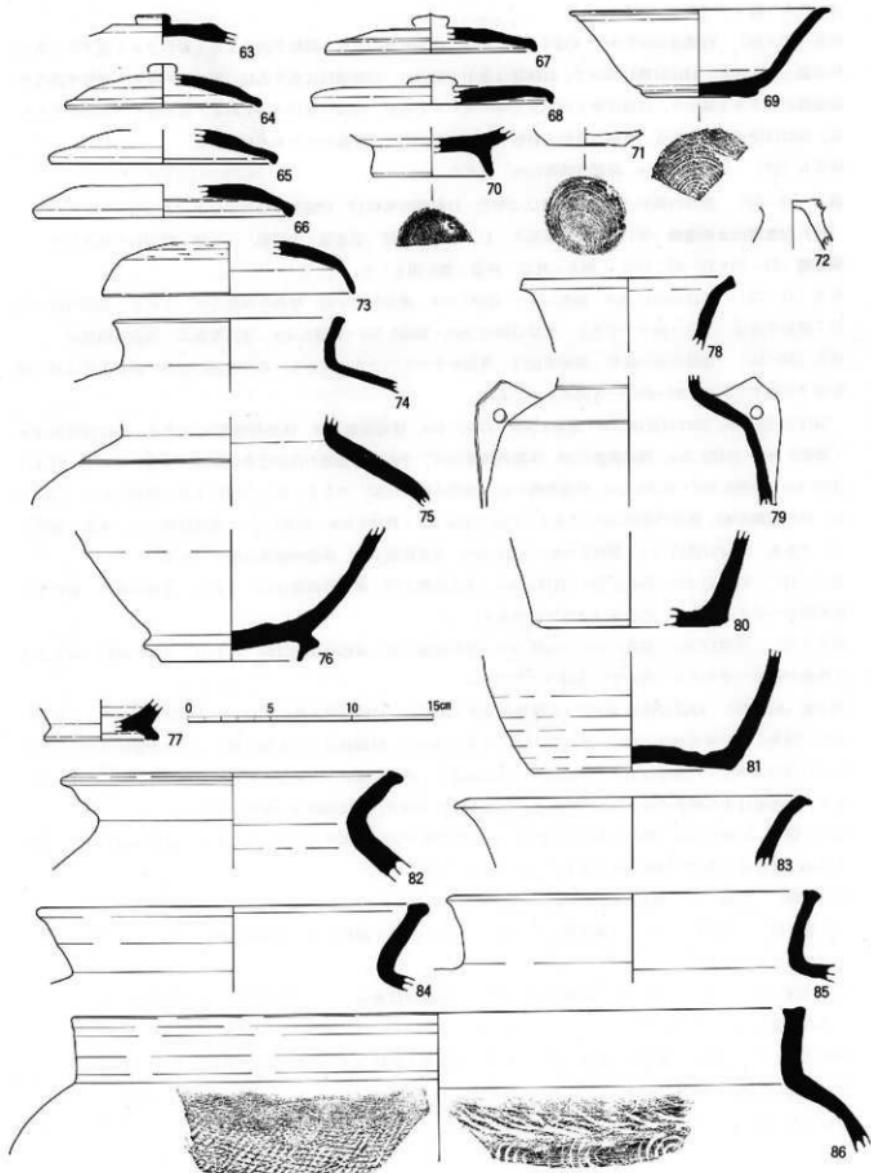
甕A蓋 (70) 口径7.2cm。底部の成形・調整手法は外側がイトキリ、内面が中心部までロクロナデである。

甕A蓋 (73) 口径15.2cmで、口縁端部は丸くなる。頂部の成形・調整手法は外側が回転ヘラケズリ、内面は中心部までロクロナデである。

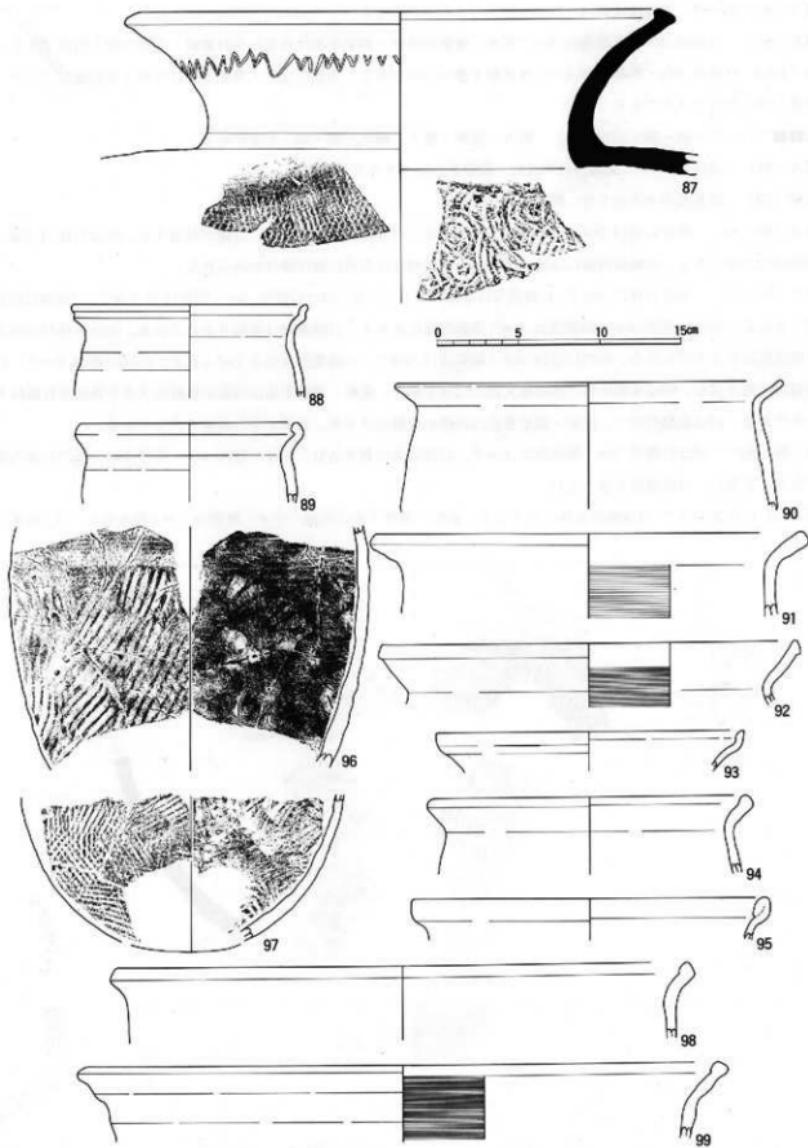
壺A (74・75) 74は口径13.8cm・頸部径13.2cmで、口縁端部は角張る。75は頸部径13.2cm・体部最大径24.6cmで、2本の沈線が入る。

壺B (76・77) 高台と体部から壺Bと考えられる。体部最大径18.8cm・台径8.4cmである。77は台径6.8cm。

双耳瓶 (78~81) 78は口径12.8cm・頸部径9.2cmである。79は体部最大径17.6cm・頸部径8.8cmで角張った耳が2カ所につき、耳には穴が1孔づつ開く。81の外側は回転ヘラケズリ。



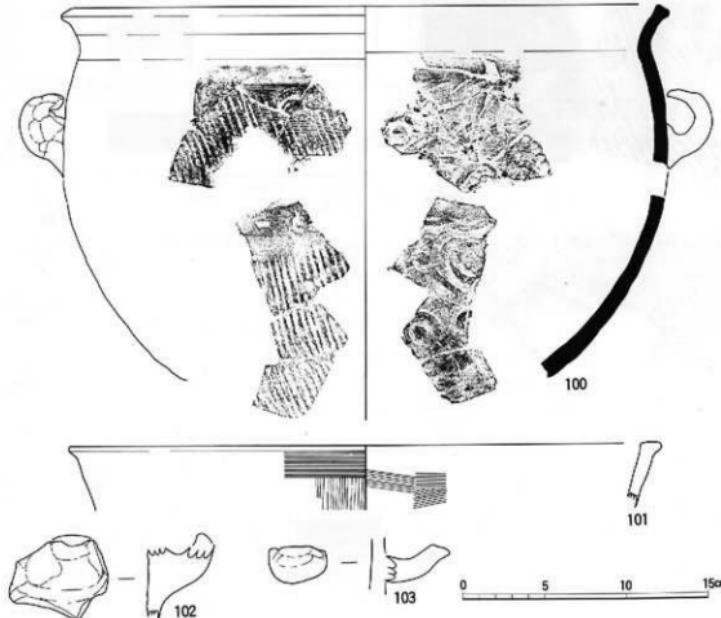
第14図 A地区包含層出土遺物実測図(1) (1 : 3)



第15图 A地区包含层出土遗物实测图(2) (1 : 3)

- 甕A (82~85・87) 口径は19.4~31.6cmで「く」の字形になる。
- 甕B (86) 口径44.4cm・頸部径44.4cmである。体部の成形・調整手法は外面が平行線紋・内面が同心円紋である。
- 鍋 (100) 口径36.0cm・頸部径35.4cm・体部最大径37.0cmである。体部の成形・調整手法は外面が平行線紋タタキ・内面が同心円紋タタキである。
- 土師器 (71・72・88~99・101~103) 梗A・高杯・甕A・甕B・鍋・瓶・把手がある。
- 梗A (71) 底径4.8cmで、底部外面の成形・調整手法はイトキリである。
- 高杯 (72) 脚基部のみの出土で、脚径3.6cmである。
- 甕A (88・89) 88は口径14.2cm・頸部径12.8cmである。口縁部内面及び体部には煤が付着する。89は口径13.4cm・頸部径12.6cmである。口縁部内面には煤が付着し、体部外面は表面に焼け剥けがみられる。
- 甕B (90~97) 90は口径23.6cmで、口縁端部は面取りされている。91は口径26.0cm・頸部径22.8cmで、口縁端部は面取りされる。92は口径25.4cm・頸部径22.4cmで頸部内面にカキメ、口縁端部は面取りされている。93は口径18.9cmで口縁端部は引き上げられる。94の口径19.6cm・頸部径17.6cmで、口縁端部は引き上げられる。95は口径21.6cmで、口縁端部は巻き込む。96は体部中程で体部最大径22.2cmを測り、成形・調整手法は内面が放射状タタキ外面平行線紋タタキである。97は底部付近で、成形・調整手法は内面が放射状タタキ、外面が平行線紋タタキである。
- 鍋 (98・99) 98は口径35.0cm・頸部径33.6cmで、口縁端部は巻き込む。99は口径38.6cm・頸部径35.6cmで口縁内面はカキメを施し、口縁端部を巻き込む。

節 (101 口径36.0cmで、口縁端部を横に引き出す。成形・調整手法は内面ハケメ・外面がハケメ後カキメ。 (図本)



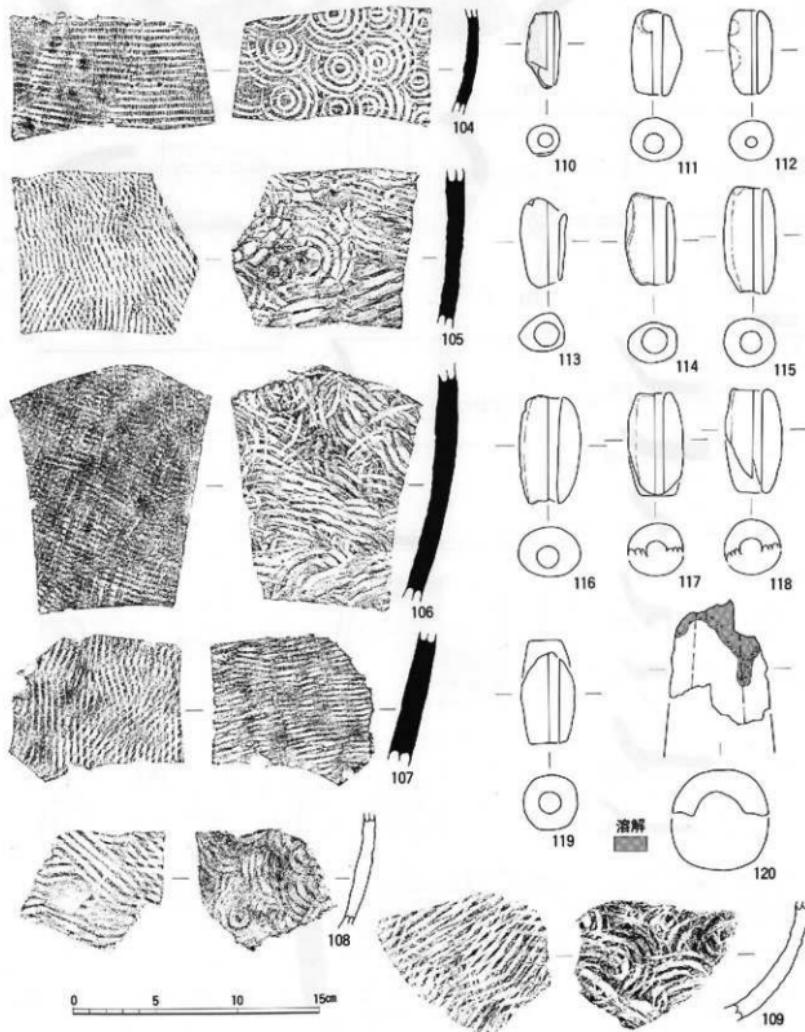
第16図 A地区包含層出土遺物実測図(3) (1:3)

管状土錐 (110~119) 前回の調査では〔狩野他1984〕細長いものを土錐A、すんぐりした長楕円形を呈するものを土錐Bと形態分類している。この分類に従うと全て土錐Bに該当する。最大規模の平均長5.96cm、幅3.01mm、重量38.4g (18g~68g) である。孔径は1cm以下が2点、1cm以上が8点である。

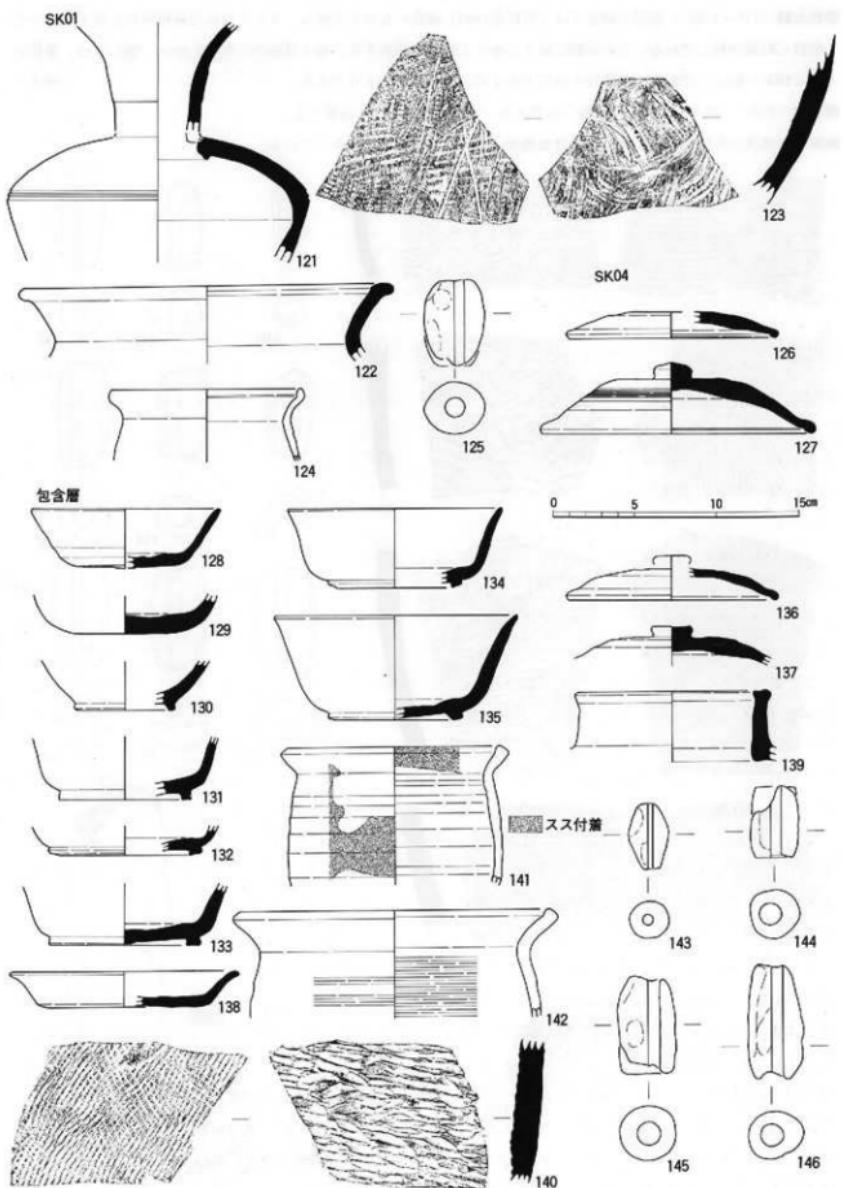
(伊佐)

鶴羽口 (120) 最大径6.0cm・孔径3.1cmである。外面がガラス質に溶解する。

鉄津 A地区からは総重量2.78kgが、包含層及び中世遺構覆土から出土している。



第17図 A地区包含層出土遺物実測図(4) (1:3)



第18図 B地区 SK01・04, 包含層出土遺物実測図 (1 : 3)

ウ B地区出土の遺物

(ア) SK01出土遺物 (第18図・図版13)

土器(須恵器・土師器)、土錐がある。

須恵器 (121~121) 壺B・甕A等がある。

壺B (121) 頭部径5.2cm・体部最大径18.5cmで、肩部に2本沈線が入る。

甕A (122) 口径22.4cm・頭部径18.6cmで、口縁端部は外に引き出す形態。

体部破片 (123) 成形・調整手法は内面が同心円紋タキ・外面が平行線紋タキである。外面にはヘラ描きがある。

土師器 (124) 甕Aがある。

甕A (124) 口径11.6cm・頭部径10.3cmで、口縁端部は巻き込む。口縁内面は煤が付着し、外面は焼け弾ける。

管状土錐 (125) 土錐Bに該当する。最大規模の平均長5.3cm・幅3.7mmである。孔径1.2cm。

(イ) SK04出土遺物 (第18図・図版13) 土器(須恵器)が出土している。

杯B蓋 (126・127) 126は口径12.6cmで、口縁端部は台形に垂れ下がる。127は口径16.4cm・器高4.4cm・つまみ径2.4cmで、口縁部は途中で屈曲し、口縁端部を巻き込む。口縁部には3条の沈線が入る。頂部の成形・調整手法は、外面は2点ともヘラキリ後ナデ、内面は126が中心までロクロナデ、127がナデである。

(ウ) 包含層出土の遺物 (第18・19図・図版13・14) 土器(須恵器・土師器)・支脚・土錐・輪羽口・砥石がある。

須恵器 (128~140) 杯A・杯B・杯蓋・皿A・横瓶がある。

杯A (128・129) 128は口径11.4cm・器高3.7cm・底径6.4cm・径高指数が32で、体部外傾度は58°である。

杯B (130~133) 134は口径13.4cm・器高4.9cm・台径7.0cm・径高指数が38で、体部外傾度は70°である。135は口径14.8cm・器高6.4cm・台径7.0cm・径高指数が43、体部外傾度は70°である。

杯蓋 (136・137) 136は口径12.6cmで、口縁部は途中で屈曲し、口縁端部を巻き込む。137はつまみ径2.5cm。

皿A (138) 口径13.6cm・器高2.2cm・底径10.6cm・径高指数が16で、体部外傾度は45°で、口縁部が屈曲する。

横瓶 (139) 口縁形態から横瓶と考えられ、口径11.5cm・頭部径12.0cmである。

土師器 (141・142) 甕A・甕Bがある。

甕A (140) 口径13.0cm・体部最大径13.2cmで、口縁端部を巻き込む。口縁内面と体部外面には煤が付着する。

甕B (142) 口径19.0cm・頭部径16.6cmで、口縁端部を巻き込む。 (岡本)

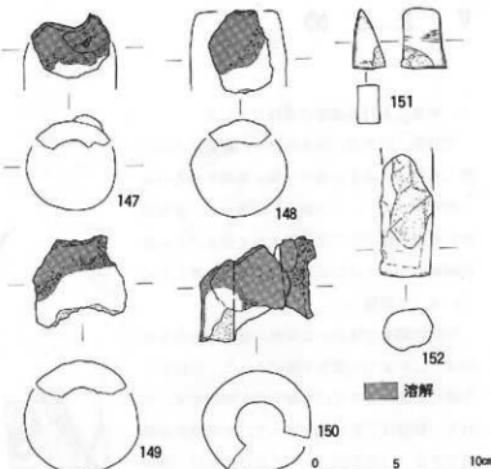
管状土錐 (143~146) 土錐Bに該当する。最大規模の平均長5.37cm・幅3.0mmである。孔径は1cm以上が3点、1cm以下が1点である。 (伊佐)

輪羽口 (147~150) 最大径7.0cm (150)、孔径3.0~3.5cm・残存長4.0~6.0cmでガラス質に溶解した部分がある。

鐵滓 写真で示した以外のものも含め、総重量6.92kgが出土した。表面は焼化しているところが多い。

砥石 (151) 長さ3.7cm・幅2.0cm・厚さ2.3cmの破片である。表面には擦痕がみられる。

土製支脚 (152) 径3.0cm・残存長7.5cmで、表面にはナデ調整が見られる。 (岡本)



第19図

V まとめ

1 中世における遺跡の性格について

昭和56・57年度の調査時には、建物や土坑の周りを方形に巡る大溝や土橋が発掘されている〔狩野他1984〕。この調査の成果から、友坂遺跡を中世城館の中で居館跡として捉え、その存続時期については12世紀から15世紀と考えられている〔宇野他1991〕。

今回の調査で検出した中世の遺構であるSD01は、これまでの調査で確認された、居館を取り囲む大溝の、さらに外側を巡る形態を呈しており、居館は二重の溝が巡っていた可能性が指摘できよう（第20図）。このSD01は出土遺物から15・16世紀頃には造られていると考えられ、

内側の大溝はじめ住居跡が12世紀から15世紀に存続していることからすると、SD01は内側の溝と同時に存在するか、内側の溝が埋められてから新たに掘られたということが考えられるのである。機能的には城館の防護の堀の機能を第一としていたものと考える。

さて、歴史的環境の中でもふれたが、「親元日記」〔竹内編1978〕のなかで友坂遺跡のある下条の地は文明16（1484）年には小田図書助知憲なる人物の所領であったことがわかっている。年代的に見て、当然、この小田氏と城館との関連が考えられるのである。このほか、越中における小田氏は、「群書類從」の長享元（1487）年に越中小田伊賀守・越中小田右馬助の名が見え、この越中小田伊賀守・越中小田右馬助については「越中志微」〔石川県立図書館協会1952〕のなかで知憲の子とされている。

当時の日本における小田という姓では「常陸小田氏」が最もよく知られており、次の2点で、常陸小田氏と下条の地を治めていた小田氏との関連性が想起できるものと考える。まず、第一に、小田図書助知憲が常陸小田氏の子孫に多い「知」の字を持っていること。第二に、知憲の子と考えられる小田伊賀守の「伊賀守」という役職が、常陸小田氏の子孫によく与えられているという点である〔尊卑分脈〕〔黒坂1983〕。この二点からして越中における小田氏は常陸小田氏の庶流の可能性が考えられるのである。

さて、越中小田伊賀守は宝町幕府の奉公衆の中にもその名が見え、越中小田氏は、土豪的存在であったと言える。下条の地が小田氏の所領であった期間や、当時この下条の地を含む婦負地域を管掌していた守護代神保氏との関係がはっきりとしない点で既然としないが、城館と見なしうる友坂遺跡では小田氏のような土豪がその任にあたっていたものと考える。

また、当地は要衝の地であったとともに、越中の式内神社とも言われている熊野神社が存在するほか、かつては熊野神社境内に正院院・友坂寺・金乗坊など24坊が存在していたと言われる〔婦中町史1967〕、一大信仰地であったと言える。前回の調査報告のなかで指摘されているが、須恵質の台座・五輪塔などの寺院に関係する遺物の出土はこれを示唆するものであろう。



第4次B地区



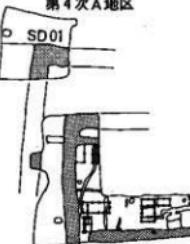
第1次A地区



第4次A地区



第2次



第1次B地区

第20図 友坂遺跡中世遺構全体図（1：1600）

2 古代堅穴住居について（第21図・第4表）

ここでは、今回発掘した友坂遺跡の堅穴住居跡も加え、富山県内の古代堅穴住居跡を考えてみたい。

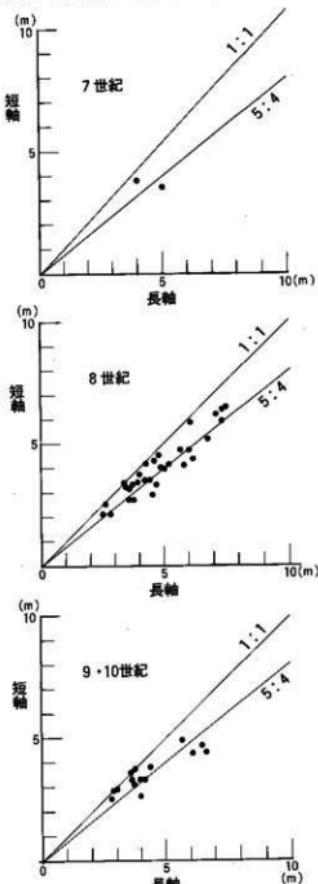
富山県内では9世紀前半以後に堀立柱建物住居が堅穴住居に代わり主流になるとしてされる論考（駒見1986）もあったが近年の調査で、9世紀後半から10世紀の堅穴住居も多数確認されている（河西1991）。詳細が解る調査例は富山県内では堅穴住居跡が第4表の11遺跡で発掘・報告されている（第4表）。

規模は7世紀以前は調査例は少ないので、8世紀は長軸5m前後が中心で2.5mから7.5mに分布する。9・10世紀は大きく長軸3~4mと6m付近の2群に分けられ、分布幅は縮小している。また形態は、9世紀代は8世紀代と比較すれば5m以上の大型の形態は長方形になる（第21図）。友坂遺跡調査例は県内の8世紀の例では、小型の部類に入る。

カマドは、導入時期の様相が明らかではないが、7世紀の小杉丸山遺跡第7号住居跡は煙道が長く、竪の中央より偏った位置に設置されている。またそれ以後も壁の中央より偏った位置に設置される例が一番多く、カマドの形式は時期により変化せず様々な形式が混在していると推測される。最近のカマド研究では土器の出土状況や支脚の残存する位置から1つ掛け・2つ掛け等のカマドの使用法が解るという（外山1991）。また、1つ掛けは西日本に多く、東日本では複数掛けが多く見られ、この形式差はその社会的背景をも示唆するとしている（杉井1992）。富山県は県東部で確認例はないが、長岡杉林遺跡・上野南遺跡・友坂遺跡等で支脚がカマド内中央に1つ残存している。カマドと炉を併設する例は県内でも多く見られ、上野I遺跡住居01、南中田D遺跡S127・40・41・51・52・59、安田遺跡、東山II遺跡等で確認され、多くは鍛冶炉等の用途が考えられている。しかし近年、土器の焼の付き方から、炉かカマドで使用したかの研究方法がある（外山1992）。これによれば、県内でも小型の土器窯が炉の様な施設で煮炊きしたと見られる土器（南中田D遺跡他）があり、鍛冶炉等の作業炉以外の用途

番号	遺跡名	所在地	引用文献
1	小杉丸山	小杉町青井谷字丸山	[上野他1984]
2	小杉流内No16	大門町戸田字順尺	[池野他1980]
3	東山II	小杉町黒河字東山	[山本他1983]
4	長岡杉林	富山市長岡字杉林	[久々他1987]
5	上野南I	小杉町上野字高畠及び入会地	[池野他1991]
6	上野南II A	小杉町上野字高畠及び入会地	[池野他1991]
7	小杉流内No20	小杉町青井谷字丸山	[池野他1979]
8	南中田D	富山市南中田字土居野割	[河西他1991]
9	友坂	婦中町下下条	本書
10	呉羽富田町	富山市北代字布口	[藤田1978]
11	安田遺跡	滑川市安田字下水	[宮本他1982]

第4表 カマド付き堅穴住居跡発掘遺跡一覧



第21図 富山県内のカマド導入後の堅穴住居の規模

も推測できるのではないかと思われる。

以上最近の論考および県内の調査から、カマドは炉から地域毎に発展しカマドに変化したのではなく、畿内から完成された形で導入され地域内に地域の要求に応じ変化していったものと考えられる。また今後の調査によってはさらに多くの様々な時期の竪穴住居跡が発見され、一層カマドの導入・使用状況が明らかにされるのではないかと思う。

3 竪穴住居跡出土土器の時期について（第22図・第5表）

ここでは、友坂遺跡竪穴住居出土の土器の時期を検討してみる。

古代土器の編年では土器組成により大きく前期と後期に分けられる。この両期は金属器を源流とする「杯・盤」系セットから「椀・皿」系食膳具への転換をもって両される〔北野1989〕。友坂遺跡の食膳具は第5表のとおり「杯・盤」系の須恵器で100%構成されており、「椀・皿」形態が中心ではなく、古代前期に属すると考えられる。北陸では9世紀第2四半期以降に杯形態が退化し楕形態への転換が進行していく〔宇野1991〕。友坂遺跡の竪穴住居跡出土土器はこの転換以前と考えられる。さらに細かく見ると食膳具は底部の成形調整手法・法量の縮小化の特徴が、北陸の編年では前IV期（8世紀後半～9世紀初頭）〔北野1989〕、県内では8世紀第3四半期から第4四半期に位置づけられる古沢1・4窟〔宇野他1989〕と似た様相と思われる。

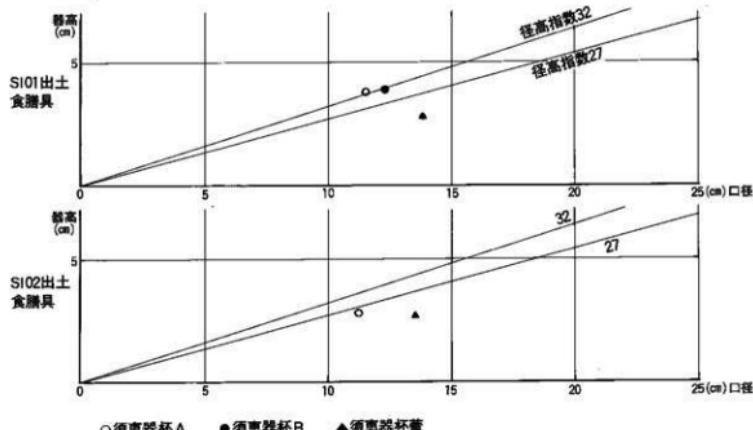
土師器煮炊具は口縁部の形態と成形・調整手法の特徴は、県内の土師器の編年〔閑1988〕では8世紀後半（田嶋編年III～IV期）にみられる。最近の調査例では8世紀後半に位置づけられる小杉町石太郎I遺跡1号窯〔池野・稻垣1992〕・富山市南中田D遺跡I1期・I2期〔河西他1991〕、小杉町上野I遺跡住居01・03〔池野他1991〕にみられる。

以上を総括すると、友坂遺跡SI01・02は8世紀後半に位置づけられよう。また、須恵器食膳具の形態・土師器甕Aの口縁端部形態などを細かく検討すれば、SI02出土土器群はSI01出土土器群よりやや新しい様相である。

（岡本）

用途	SI01		SI02	
	個体数	%	個体数	%
食膳具 須恵器	3	100.0	3	100.0
食膳具 小計	3	50.0	3	37.5
貯藏具 土師器	1	100.0	0	0
貯藏具 小計	1	16.7	0	0
煮炊具 土師器	2	100.0	5	100.0
煮炊具 小計	2	33.3	5	62.5
總計	6	100	8	100.0

第5表 用途別土器組成



第22図 竪穴住居跡出土食膳具法量表

4 友坂遺跡における漁労について

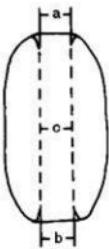
これまでの友坂遺跡の調査では、33点の古代の管状土錐が出土している。この管状土錐の用法については、民俗例や江戸時代の種々の図鑑のなかに見られる。富山県に関するものとしては、『越中魚津漁業図鑑』・『日本山海名産図会』などがあり、管状土錐が海・川における漁の網に錐として使われていることが見てとれる。その中でも「日本山海名産図会」では、神通川の鱈漁が取り上げられ、その図示のなかで流し網の下に岩（いわ）といわれる錐を約4cm間隔で取り付けている様子が見られる。このように河川で用いられる網に錐として装着されたのが、内陸部の遺跡で出土する管状土錐であろう。今回の友坂遺跡の調査では、住居跡の窓付近から管状土錐が出土している。当時の重要な生業の一つであったと考えられる漁労に使用された網は、川の近く、あるいは作業小屋ないし住居跡内で編まれ、使用後は住居跡内に保管されたと考えられる。『富山県史民俗編』〔富山県1973〕には、網の製作について「どこかの漁師も大正半ばまでは、網の糸は自分でよったものである。1本の竿を渡して、網のカス糸を2本かけ、糸の先端に重りを1つづつつけ、計4つの重りになる。」との記載がある。このなかの「重り」が、手のひらに入るには手ごろな土錐Bと考えられ、友坂遺跡例は住居跡内での網の製作を示唆するのではないかと考えるのである。

近・現代に行われている県内河川における網漁の網には、投網・巻網・刺網・袋網などがある〔富山県1983〕。また、近世に神通川で使用された主な網には、投網・流し網・刺網などがある〔富山県史1987〕。近世から現代にかけて神通川における漁法は、規模・技術の面で大きな変化が見られないといえる。古代・中世の漁法については地引網のようなものよりも、むしろ投網・刺網・巻網・流し網が用いられたと考えられるだろう。友坂遺跡で見られる土錐A・Bの形態〔狩野他1984〕差は、両形態が同時期に存在していることから時期差によるものとは考えるより、むしろ網の種類の違いによるものと考えたほうがよいと考える。土錐Aのように大形の錐は、ある程度の人手のかかる刺網・巻網・流し網に用いられ、土錐Bのようにできるだけ軽くしかも細く作られるものは、一人で行う投網に装着されたものと考えるのである。

さて、古代の越中においては、貢献品として鮭およびその加工品を納めていたことが「延喜式」などで既に知られている〔富山県1976〕。このことは、鮭の遡上の多さをも示していると言えるが、その鮭の貢納も平安時代12世紀半ばには鮭が取れなくなり、代用として鮭を納めていたことがわかっている。このことから古代の友坂遺跡の人々の鮭漁は、12世紀半ばでは盛んに行われていたと考えられる。その主な漁場は、神通川の支流である井田川であろう。この神通川および井田川における鮭・鱈取りの中世における記録は見られないが、1981年の友坂遺跡調査時には、中世のものと考えられるヤスが出土している。最近まで投げる、もしくは潜って突くなどして川を泳いでいる鮭・鱈をヤスを用いて捕っていたとのヤツキの民俗報告〔富山県1973〕からすると、友坂遺跡出土のヤスは、ヤツキ漁法が中世に行われていたことを示していると考えられるのである。

このように、友坂遺跡の調査により出土した土錐・ヤスから、河川における漁労を生業の一貫としている古代・中世の人々の生活が見て取れるのである。一方、友坂遺跡に限らず県内の遺跡を概観すると遺跡出土土錐の多さは中世より古代が圧倒しているこのことは、前述のように古代から中世にかけて鮭の漁獲量が減少していくことと、古代から中世への国家体制における税制の抜本的変革と共に密接に関連しているのではないかと考える。

（伊佐）



第23図 管状土錐
孔径測定
部位図
 $a \geq b$
(山本1986より転載)

引用・参考文献

- イ 池野正男・上野 章 1980 「富山県小杉町・大門町小杉流通業務団地内遺跡群第2次緊急発掘調査概要」 富山県教育委員会
池野正男・山本正敏・酒井重洋 1989 「富山県小杉町流通業務団地No20遺跡緊急発掘調査概要」 富山県教育委員会
池野正男・酒井重洋・納谷守幸・原田義範 1991 「上野南遺跡群発掘調査報告」 小杉町教育委員会
池野正男・稻垣向美 1992 「石太郎I遺跡・石太郎J遺跡」 富山県埋蔵文化財センター
石川県埋蔵文化財センター 1952 「越中志賀 下巻」 富山新聞社
今谷 明・鶴枝文子 1988 「富山市守護職家事典 下巻」 新人物往来社
ウ 上野 章・允 1978 「富山県小杉町市日の宮遺跡発掘調査報告書」 富山県教育委員会
上野 章・允 1984 「富山県小杉町・大門町小杉流通業務団地内遺跡群第6次緊急発掘調査概要」 富山県教育委員会
宇野隆夫 1991 「律令社会の考古学的研究・北陸を舞台として」 桂書房
宇野隆夫・他 1991 「城跡遺跡出土の土器・陶磁器」 北陸中世土器研究会
宇野隆夫・春日真理・田中道子 1988 「越中上末窯」 富山大学人文学部考古学研究会
カ 河西健二・吉澤 隆・岡本淳一郎・押川恵子 1991 「富山県富山市南中田D遺跡発掘調査報告書」 富山県埋蔵文化財センター
神野 信・他 1992 「木更津市芝野遺跡における水田跡について」 「研究連絡誌第34号」 財団法人千葉県文化財センター
鈴井明徳 1986 「日本貿易開拓史の研究」 同朋会
狩野 駿・鶴本正幸・松島吉信・田上清幸 1984 「富山県婦中町友坂遺跡開発報告書」 婦中町教育委員会
川村 勝 1992 「駿平研究所報告 第1回 隅城塹遺跡」 荒城美津浦、駿平調査会
キ 北野博司 1989 「履年の概要」 「北勝の古代手工業生産」 北陸古代手工业生産史研究会
木下 真・他 1979 「富山市芝野遺跡における水田跡について」 「研究連絡誌第3号」 財団法人千葉県文化財センター
京田良忠 1976 「富山の古美術・富山文庫」 約玄出版
ク 久々忠義・他 1982 「富山県小杉町・大門町小杉流通業務団地内遺跡群第3・4次緊急発掘調査概要」 富山県教育委員会
久々忠義・他 1985 「富山市上町町立庄城第5次緊急発掘調査概要」 上町町教育委員会
久々忠義・吉川知明・岡本淳一郎 1987 「長岡軒林遺跡」 富山市教育委員会
久々忠義 1986 「富山県内出土の鐵器について」 「大境10号」 富山考古学会
久保尚文 1983 「婦中中世史の研究」 千葉書房
黒坂勝美國史系講師 1983 「意半半孫 第1話」 吉川弘文館
コ 駒見和夫 1986 「富山県における堅穴居と獨立柱建築物」 「大塊」 第10号 富山考古学会
サ 斎藤 浩・岡本淳一郎・島田修一 1992 「富山県福光町梅原安久造跡群II」 福光町教育委員会
酒井重洋 1985 「富山県八尾町長良遺跡・京ヶ峰古墳跡緊急発掘調査概要」 八尾町教育委員会
笠森健一 1978 「カドについて」 「経時遺跡第3次・長宮遺跡」 上福岡市教育委員会
寒川 旭 1992 「地質考古学」 中央公論社
シ 島田篤一 1992 「友坂遺跡」 「富山県埋蔵文化財センター一年報・平成3年度」 富山県埋蔵文化財センター
ス 杉井 健 1992 「『艦研究の可能性』『第32回埋蔵文化財研究集会 古墳時代の艦を考える』 墓碑文化財研究会
セ 間 清 1988 「越中における古代前半期の土師器」 「シンポジウム北陸の古代時研究の現状と課題」 石川考古学研究会・北陸考古学研究会
ト 岩瀬清志 1993 「富山県婦中町小舟中經跡発掘調査報告」 婦中町教育委員会
竹内理三編 1976 「観光日記」 「増補歴史料大成 第12巻」 龍城書店刊
谷 旬 1982 「古代の日本のカマド」 「千葉県文化財センター研究紀要」 7 財団法人千葉県文化財センター
ト 富山県 1973 「富山県史・民俗編」
富山県 1975 「富山県史・史料編Ⅱ中世」
富山県 1978 「富山県史・通史編」 原始・古代
富山県 1978 「富山県史・史料編Ⅲ近世中」
富山県 1983 「富山県史・通史編Ⅳ現代」
富山県 1983 「土地分類基本調査・富山」
富山県 1984 「富山県史・通史編Ⅱ中世」
富山県神社社序 1983 「富山県神社総録」 北日本印刷株式会社
富山市史編纂委員会 1987 「富山市史・通史『上巻』」
外山政子 1991 「『三ツ寺丘遺跡のカマドと煮炊』『三ツ寺丘遺跡』 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
外山政子 1991 「『伊那カマド』がもう一つのカマド構造について」 「研究紀要」 10 財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
ハ 服部 部・他 1993 「経原山西周跡」 爱知県瀬戸市教育委員会・(財)瀬戸市文化財センター
フ 深井三郎 1973 「地形区分とその性状などの概要」 「土地分類図(富山県)」 財団法人日本地図センター
藤田富士夫 1978 「富山市吳羽高田町遺跡発掘調査報告書」 富山市教育委員会
藤森栄一・他 1973 「殿村遺跡—長野県諏訪郡下諏訪町殿村遺跡緊急発掘調査」
婦中町史編纂委員会 1987 「婦中町史・上巻」 婦中町役場
婦中町史編纂委員会 1986 「婦中町史・下巻」 婦中町役場
マ 痘病一志 1988 「内藤部における鐵文發」 「考古学と技術」
ミ 宮田進一 1992 「越中ににおける中世土器の履年」 「第5回北陸中世土器研究会・中世前期の遺跡と土器・陶磁器・深堀」 中世土器研究会
富本幸雄・金子忠雄・斐田 実 1982 「富山県滑川市安田・寺町遺跡発掘調査報告書」 滑川市教育委員会
ヤ 安田良忠 1988 「越中瀬戸四百年的変遷」 「越中瀬戸一発祥四百年記念誌」 越中瀬戸焼発祥四百年記念顕彰会実行委員会
山本正敏・間 清・久々忠義 1983 「東公園太閤山ランード内遺跡群調査報告(2)」 富山県教育委員会
ヨ 橋川好富 1987 「『艦の出現とその背景—瑞玉塚を中心として』」 「瑞玉の考古学」 新人物往来社
吉岡康麻 1969 「絶縁珠洲古墳」 「珠洲の名陶」 珠洲市立珠洲焼資料館
不明 「越中魚津県境圖鑑」 石川県立図書館蔵

図版 1

A 地区遺構

1. 上層全景
(南から)



2. 下層全景
(南から)



3. S D01断面
(北から)



図版 2
A 地区遺構



1. S I 01・02
(南から)



2. S I 01・02
(東から)



3. S I 01・02断面
(北から)

図版 3

A地区遺構

1. S I 01
(東から)



2. S I 01カマド
遺物出土状況
(西から)



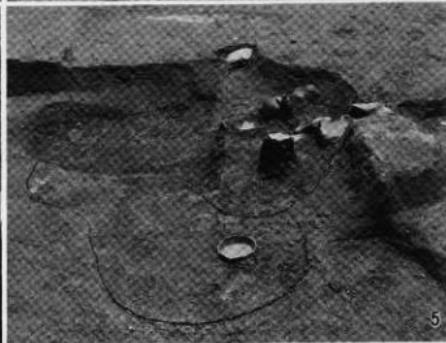
3. S I 01カマド
完掘状況
(西から)



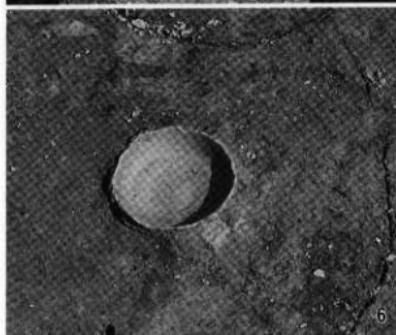
4. S I 01カマド
支脚
(西から)



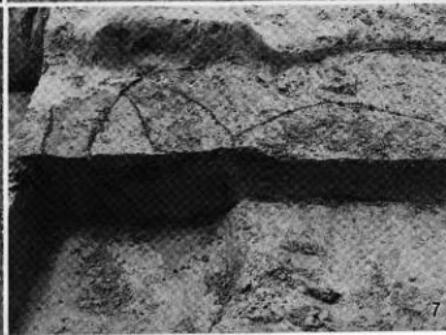
5. S I 01カマド
遺物出土状況
(西から)



6. S I 01
遺物出土状況
(西から)



7. S I 01カマド断面
(北から)



図版 4
A 地区遺構



1. S I 02
(南から)



2. S I 02
(東から)



3. S I 02カマド
遺物出土状況
(北から)

図版 5

A 地区遺構

1. SI 02カマド

完掘状況

(北から)

2. SI 02カマド

支脚

(南から)



3・4
SI 02カマド

遺物出土状況

(北から)



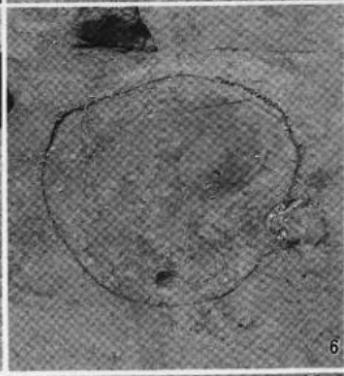
5. SI 02カマド

遺物出土状況

(北から)

6. SI 02焼土 1

(北から)



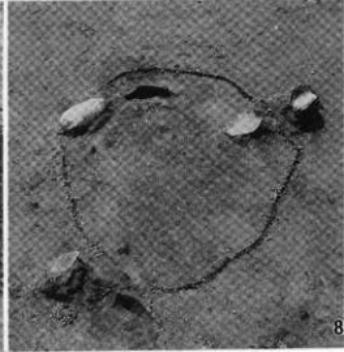
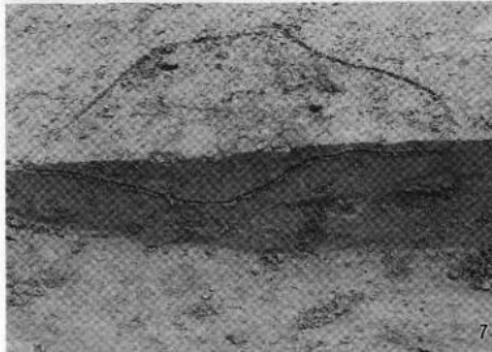
7. SI 02焼土 1

断面

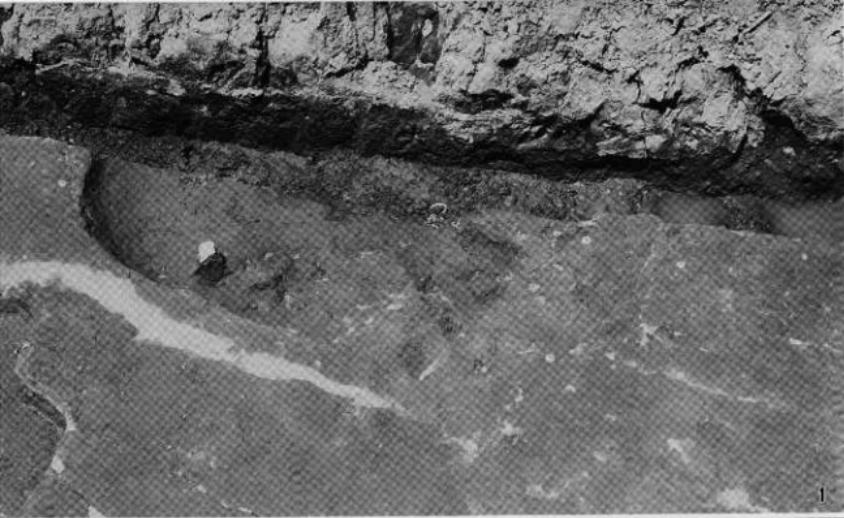
(北から)

8. SI 02焼土 2

(北から)



図版 6
A 地区遺構



図版 7

B地区遺構

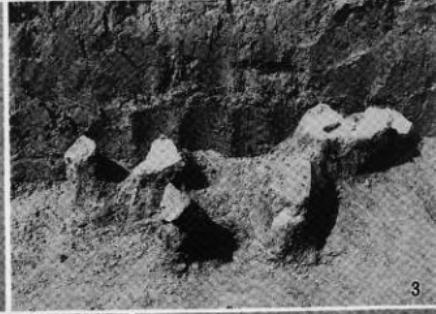
1. 全景
(南から)



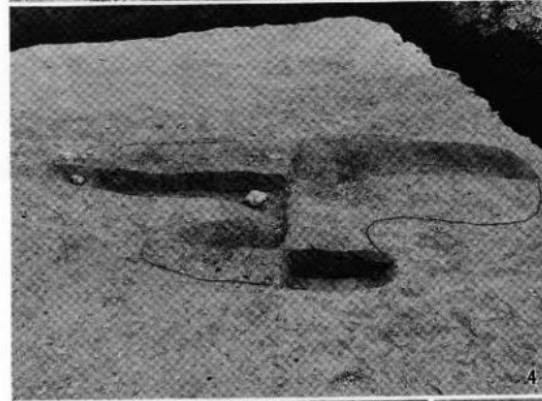
2. SK01
(東から)



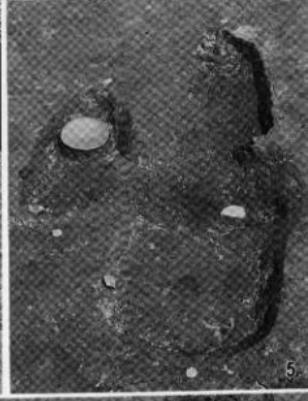
3. SK01
遺物出土状況
(北から)



4. SK04断面
(南から)



5. SK04
(東から)



6・7
SK04
遺物出土状況



6

7

図版 8
A地区遺物

3

2

1

9

8

1

1. 珠洲

4

7

2. 珠洲

2

17

15

18

10

13

16

3. 中国製陶磁器
瓷器系陶器
近世陶磁器

11

12

14

3

图版9

A·B地区遗物

1·2
A地区S D01
3.
A地区S I01
4.
A地区S I02

